

御堂ヶ池古墳群
音戸山古墳群

発掘調査概報

昭和60年度

京都市文化観光局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

多数の文化財と優れた伝統文化の継承に幾多の労をついやしている歴史都市「京都」は、より活力ある豊かな近代都市建設にむかって発展の取り組みを強めているところであり、更に平安建都1200年の歴史的節目を8年後に迎えようとしております。

この平安建都1200年記念事業並びに21世紀の理想のまちづくり計画は、都市の優れた伝統のうえに新しい創造を加えるもので、市民が一体となって取り組んでいるところです。

しかしながら、まちづくりの基幹としての「都市建設事業」は、歴史的文化遺産の保存と継承に大きな影響を与えるもので、本市では埋蔵文化財の保存については、市民の理解と協力を得て行っており、また保存し難い遺跡の調査についても市民の協力を得ているものです。

この調査概報は、昭和60年度国庫補助事業として実施した発掘調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導いただいた関係各位、並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

京都市文化観光局

例 言

1. 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群の発掘調査概要報告である。
2. 調査箇所は以下のとおりである。

名称 御堂^{おんどがけ}ヶ池21・26号墳 所在地 京都市右京区梅ヶ畑向ノ地町27-1・27-4

名称 音戸山^{おんどやま}7・8号墳、音戸山西支群1・2号墳 所在地 京都市右京区鳴滝音戸山町11.11-3
3. 発掘調査の期間と担当者及び調査参加者は以下のとおりである。

御堂ヶ池21・26号墳 昭和59年11月～昭和60年1月 京都市埋蔵文化財調査センター
技術吏員 北田栄造

音戸山7・8号墳 昭和59年10月～昭和60年1月 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
調査員 木下保明・丸川義広

音戸山西支群1・2号墳 昭和59年11月・昭和60年3月 北田
調査補助員 東 洋一・児玉光世・佐山恭代・ト田健司・夏原三郎・長谷川行孝・
藤野彦之・牟田嘉孝
4. 本書の執筆・編集は第1・2章を北田が担当し、第3章を丸川が担当した。写真撮影は一部を除き同研究所調査員牛嶋 茂が担当した。
5. 本書で使用した方位は、平面直角座標系Ⅵによった。標高は海拔高T.P.を使用した。
6. 本書で使用した位置図は、京都市発行の1/2,500都市計画基本図（鳴滝・宇多野）を調整使用したものである。

本文目次

第1章 御堂ヶ池21・26号墳

1 調査経過	1
2 御堂ヶ池21号墳	2
3 御堂ヶ池26号墳	7
4 小結	10

第2章 音戸山西支群1・2号墳

1 調査経過	12
2 音戸山西支群1号墳	12
3 音戸山西支群2号墳	15
4 小結	19

第3章 音戸山7・8号墳

1 調査経過	20
2 音戸山7号墳	25
3 音戸山8号墳	28
4 小結	32

図版目次

図版1 遺跡	1 御堂ヶ池21号墳遠景（南東から）
	2 同21号墳調査前全景（西から）
図版2 遺跡	1 御堂ヶ池21号墳全景（西から）
	2 同石室全景（西から）
	3 同遺物出土状態（東から）
図版3 遺跡	1 調査前全景（右から御堂ヶ池24・25・26号墳、北東から）
	2 御堂ヶ池26号墳調査前全景（東から）
図版4 遺跡	1 御堂ヶ池26号墳全景（北東から）
	2 同石室全景（北東から）

- 3 同石室床面と奥壁（北東から）
- 図版 5 遺跡 1 音戸山西支群 1～4号墳（左から 1・2・3・4号墳、北東から）
2 同 1・2号墳調査前全景（左 1号墳、右 2号墳、東から）
- 図版 6 遺跡 1 音戸山西支群 1号墳石室全景（東から）
2 同遺物出土状態（東から）
- 図版 7 遺跡 1 音戸山西支群 2号墳全景（東から）
2 同南側壁（北から）
3 同奥壁（東から）
- 図版 8 遺跡 1 音戸山 7・8号墳遠景（中央左寄り、南西から）
2 調査前全景（左 8号墳・右 7号墳、南西から）
- 図版 9 遺跡 1 音戸山 7・8号墳全景 1（手前が 7号墳、南から）
2 同全景 2（南から）
- 図版 10 遺跡 1 音戸山 8号墳全景（南から）
2 同石室全景（石材転落状態、南から）
3 同石室の状態（北西から）
- 図版 11 遺物 御堂ヶ池 21号墳（21-1～4、鉄 1～3）、
音戸山西支群 1号墳（西支 1-1～4、石鏃）、
音戸山西支群 2号墳（西支 2-1・2）出土遺物
- 図版 12 遺物 音戸山 7号墳（7-2・3）、7号墳西方斜面（7西-1～4）、
音戸山 8号墳（8-1・4・5）出土遺物

挿 図 目 次

- 図 1 周辺古墳分布図（1：5,000、黒色が調査古墳）
- 図 2 御堂ヶ池 21号墳調査前墳丘測量図（1：200）…………… 2
- 図 3 御堂ヶ池 21号墳墳丘断面図（1：100）…………… 3
- 図 4 御堂ヶ池 21号墳調査後墳丘測量図（1：200）…………… 4
- 図 5 御堂ヶ池 21号墳石室実測図（1：50）…………… 4 - 5
- 図 6 御堂ヶ池 21号墳出土須恵器実測図…………… 6
- 図 7 御堂ヶ池 21号墳出土鉄鏃・耳環実測図…………… 7

図8	御堂ヶ池20号墳出土須恵器実測図	7
図9	御堂ヶ池26号墳調査前墳丘測量図(1:200)	8
図10	御堂ヶ池26号墳墳丘断面図(1:100)	8
図11	御堂ヶ池26号墳石室実測図(1:50)	9
図12	御堂ヶ池26号墳調査後墳丘測量図	10
図13	御堂ヶ池26号墳出土須恵器実測図	10
図14	音戸山西支群1~4号墳墳丘測量図(1:200)	13
図15	音戸山西支群1号墳石室実測図(1:50)	14
図16	音戸山西支群1号墳出土須恵器実測図	15
図17	音戸山西支群1号墳出土紡錘車・石鏃実測図	15
図18	音戸山西支群1・2号墳墳丘断面図(1:100)	16
図19	音戸山西支群2号墳調査後墳丘測量図(1:200)	17
図20	音戸山西支群2号墳出土須恵器実測図	17
図21	音戸山西支群2号墳石室実測図(1:50)	18
図22	音戸山古墳群位置図(1:1,500)	21
図23	音戸山7・8号墳墳丘測量図1(調査前、1:200)	22
図24	音戸山7・8号墳墳丘測量図2(表土排除後、1:200)	23
図25	音戸山7・8号墳墳丘測量図3(封土排除後、1:200)	24
図26	音戸山7号墳墳丘断面図(1:80)	26
図27	音戸山7号墳出土須恵器実測図	27
図28	音戸山7号墳西方斜面出土須恵器実測図	27
図29	音戸山8号墳列石実測図(1:50)	28
図30	音戸山8号墳墳丘断面図(1:80)	29
図31	音戸山8号墳石室実測図(1:50)	30
図32	音戸山8号墳出土須恵器・土師器実測図	31

写真目次

写真1	調査風景(音戸山7号墳、北から)	20
-----	------------------	----

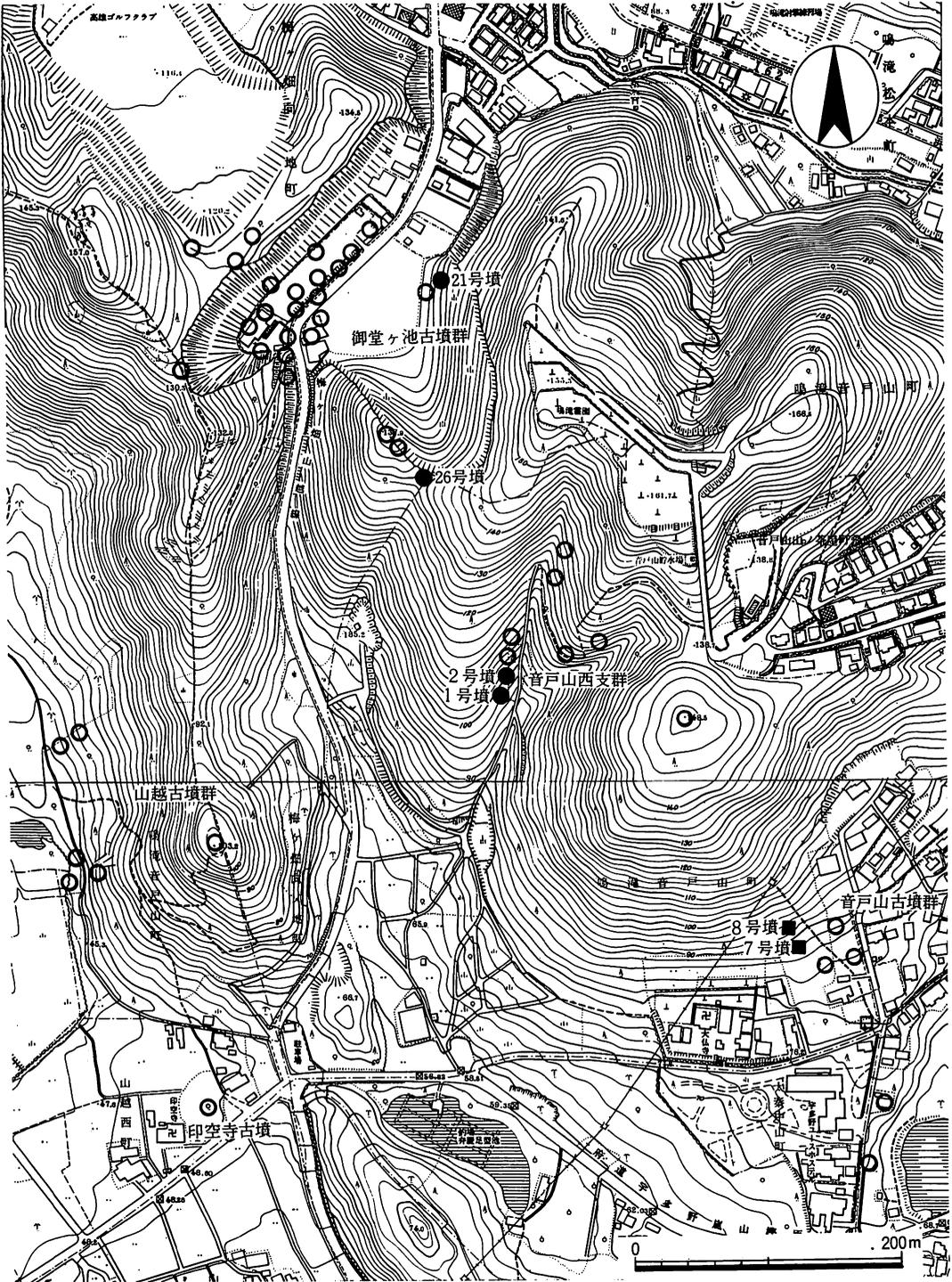


図1 周辺古墳分布図 (1:5,000、黒色が調査古墳)

第1章 御堂ヶ池21・26号墳

1 調査経過

調査に至る経緯 昭和48年3月にゴルフ練習場造成工事に先だって、御堂ヶ池20号墳の^{注1}発掘調査を実施したが、その後工事は中断され20号墳は地下に埋没した状態で保存されていた。ところが、その造成計画が再開され、今回同じ敷地内にある21号墳、26号墳の発掘調査を実施することになった。

御堂ヶ池古墳群は今回の調査の際新たに発見されたものを含め総数26基が確認されている。古墳群の立地は谷合いの御堂ヶ池（昭和47～48年埋立）を挟んで西側の丘陵斜面に21基、東側の丘陵頂上及び斜面に5基がそれぞれ点在している。今回発掘調査を実施した21号墳は、池の東側斜面に立地し、20号墳の背後に隣接している。26号墳はその南側の丘陵上に24・25号墳等と並んで、その一番東側に位置している。発掘調査は造成予定地内にある21・26号墳を対象として行った。なお、調査以前に造成のための重機が入られたために、26号墳は墳丘の半分が削平されていた。

本古墳群では過去に9基の古墳を発掘調査しており、今回の2基を含めて総計11基の発掘調査を実施している。過去の調査は、昭和29年に11号墳が同志社大学によって調査され、昭和39・40年には宅地造成、道路敷設工事に伴い6基（6・12・13・14・15・17号墳）が^{注2}京都府により発掘調査されている。この時の造成は大規模なもので、御堂ヶ池周辺の景観はこの段階で一変したといえる。なおこの造成工事中に弥生時代中期の外縁付鈕式銅鐸4個が発見されている。さらに昭和48年には六勝寺研究会により20号墳が調査され、昭和57年には群中で最大規模の1号墳が、やはり宅地造成に伴い^{注3}調査されている。現在群中で現存するものは、埋没のものを含め10基であり、消滅したものは16基である。

調査の経過 調査は21号墳から開始した。調査の経過は21・26号墳共に任意方向のトラバースを設定して地形測量を行い、十字に畦を残して表土剥ぎを行った。この段階で26号墳は石室の平面輪郭を検出したが、21号墳に関しては、かなり後世の石取り等により石室が荒されていたため、トレンチによる掘り下げによって石室を検出した。石室内の調査では、床面を検出した状態での全景及び個別の写真を撮り、実測図を作成した。最後に断ち割りを行い、この断面によって墳丘構築状態を記録し、埋戻して現場作業を終了した。

2 御堂ヶ池21号墳

墳丘 21号墳は昭和48年に調査を終了している20号墳の後方斜面に立地している。墳丘形態は円墳で、周溝は斜面を切り込んでつくられており、墳丘の東半分にめぐらされている。古墳の立地するこの丘陵斜面は、 20° 前後の急勾配であるため、古墳を構築するにあたっては、後方斜面を削り取って、平坦面を築いている様子がその地形から判断される。

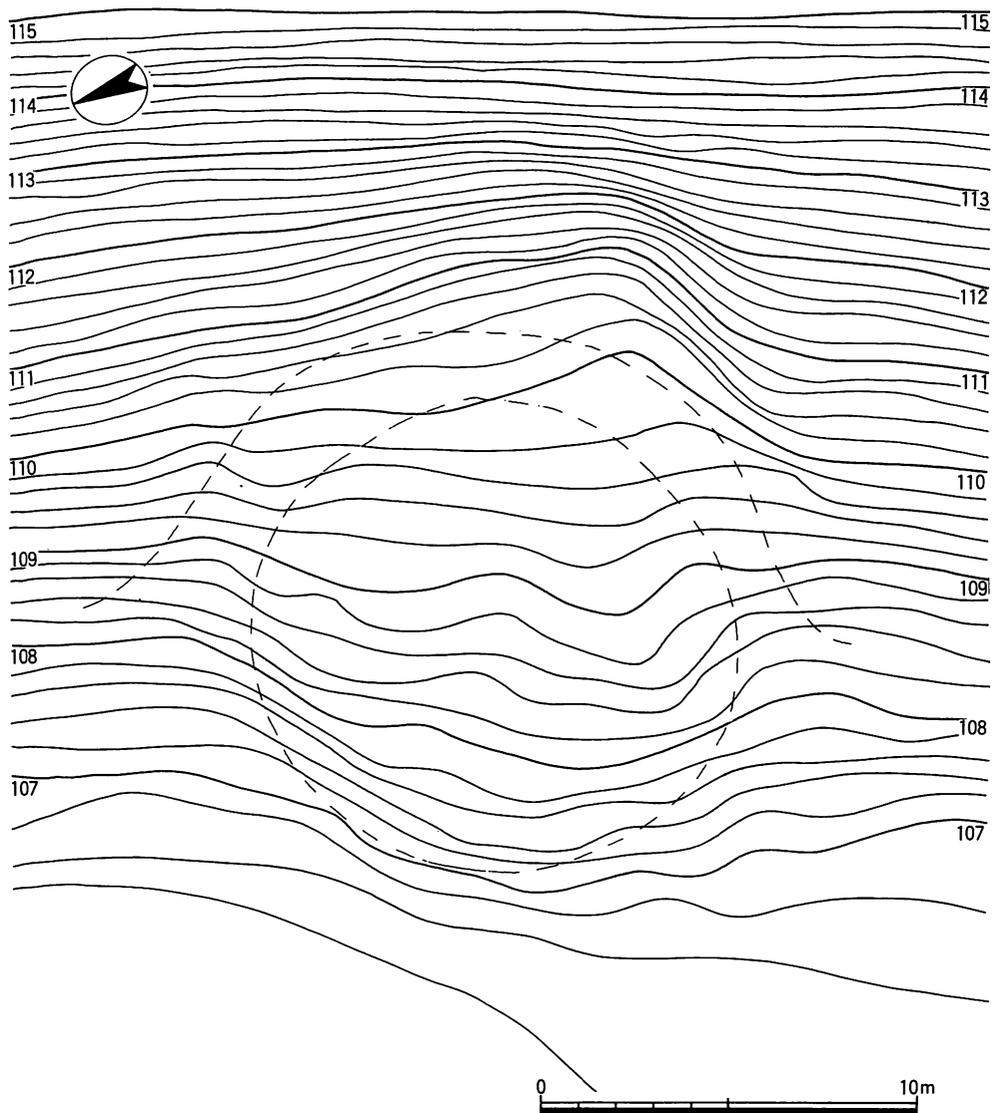


図2 御堂ヶ池21号墳調査前墳丘測量図 (1:200)

墳丘規模は、南北が周溝心々間で約16m、東西は東が周溝の中心、西が墳丘裾部で約15mを測る。

墳丘を構成する封土は、厚い所では80cmほど残存しているが、墳丘中央の石室付近では後世の盗掘・石材取りによる攪乱がかなり深くまで達している。

封土の状態は、地山の黄褐色土層及び暗赤褐色砂泥層を主体とするもので、部分的に拳大の礫を多く含んでいる。

石室を構築するための掘り形は、地山を切り込んでつくられているが、その規模は、横断面で肩口の幅約4m、深さ約1mである。また周溝は、石室後方の主軸ライン上で幅約2m、深さ30cmを測った。

内部構造 本墳の内部構造は両袖式の横穴式石室で、西北西の方向に開口している。

石室規模は、全長8.3m、玄室長3.5m、同幅2.1mを測る。羨道部の幅は、開口

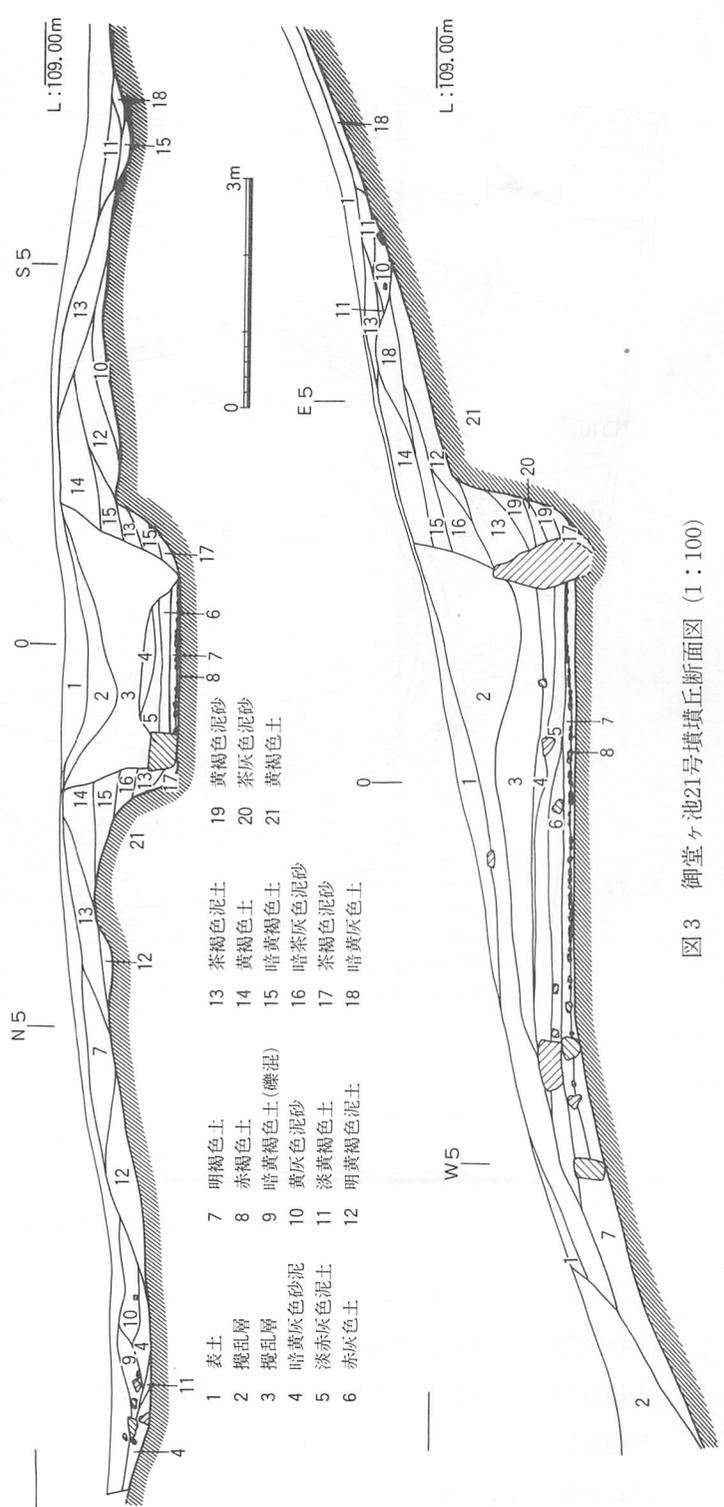


図3 御堂ヶ池21号墳墳丘断面図 (1:100)

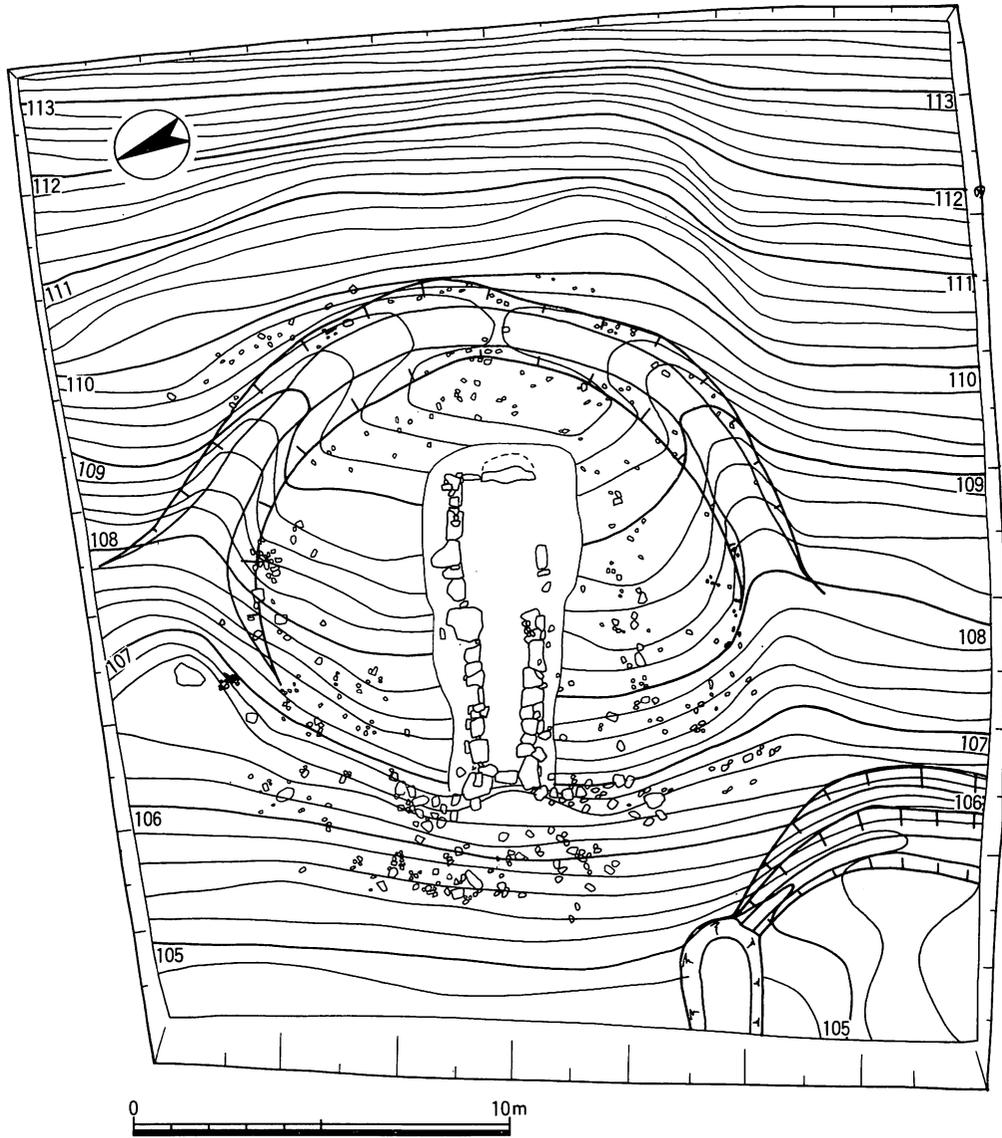


図4 御堂ヶ池21号墳調査後墳丘測量図 (1:200)

部寄りで0.9m、最大幅は玄室寄りにあり1.25mを測る。

石室高は、天井部及び壁面石材の大半が欠損しているため不明であるが、現状では北壁の袖石が最も高く1.15mを測る。石室平面は左右がほぼ対象となっており、均整のとれた形態を呈している。また石室の残存状態は良好ではなかったが、石室前面の開口部左右には石室端の指標と考えられる列石が検出された。

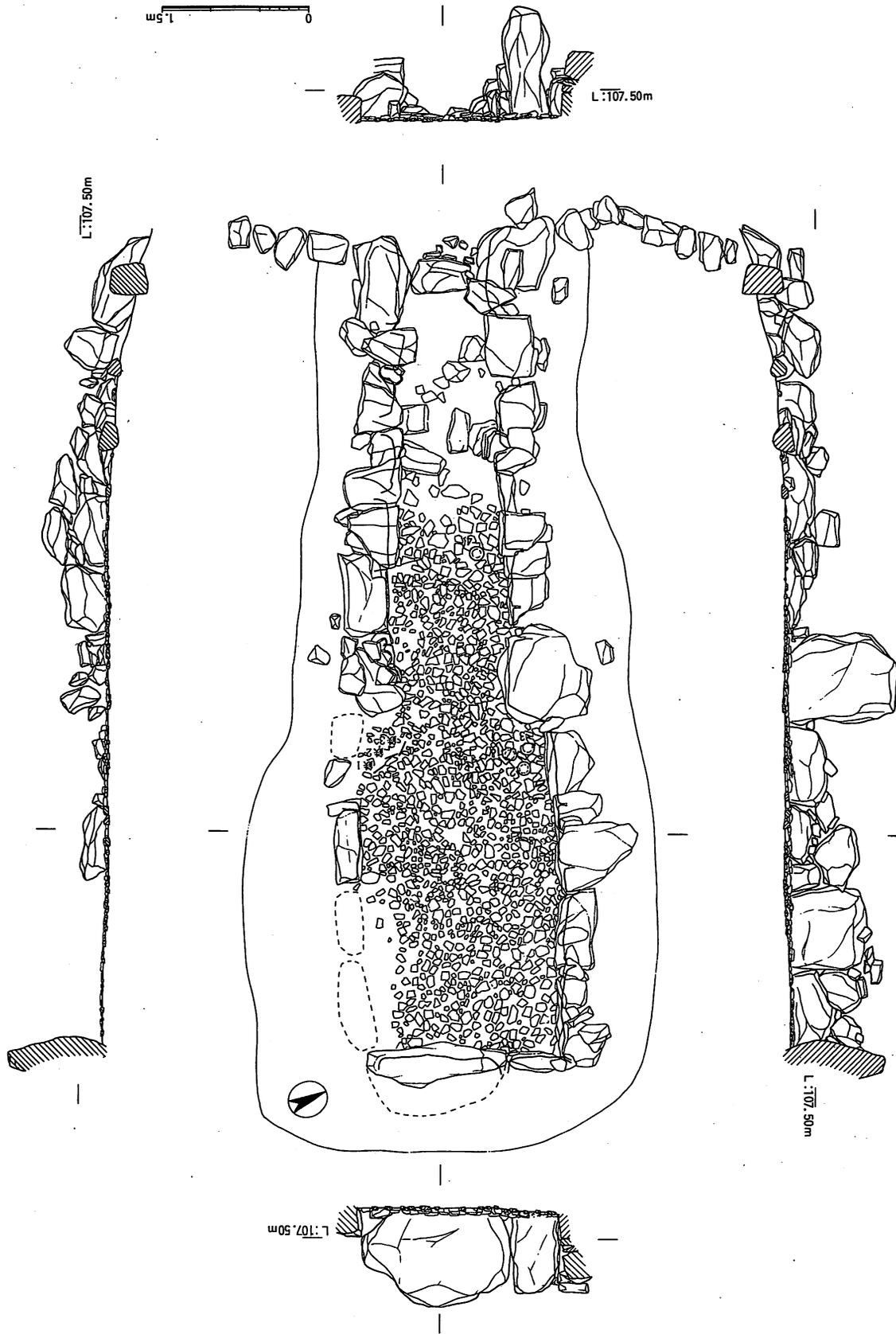


図5 御堂ヶ池21号填石塞実測図 (1:50)

石室に使用された石材の種類は全てチャートである。石材の大きさは長さ70～80cm、幅30～40cmのものが最も多く、残存するものでは奥壁に使用された2石のうち南寄りの石室が、長さ1.5m、幅1mと最も大型である。次に北壁の袖石が長さ1.2m、幅0.9mを測り、同じく北壁の奥壁から2個目の石材が長さ0.85m、幅0.8mを測った。なお、南壁の袖石は本来北壁の袖石と同じ規模をもっていたと想定されるが、検出した段階では、細かく破碎されていた。

石室の遺存状態は悪く、最下段ないしは2段目までがみられるのみである。南壁の奥壁付近に関しては最下段石材も抜き取られていたが、石材の据え付け痕跡により、この部分に2石の最下段石材が据えられていたことがわかる。

石組の状態は、奥壁と袖石及びその他の数石が縦積みをしている以外は全て横積みである。

次に床面をみると、玄室の全面及び、羨道部の開口部から2.5mの所までに敷石を一面に施している。この敷石の多くは10cm前後の板状のもので、材質は壁面石材と同じチャートである。羨道部の中央よりやや開口部寄りの所には長さ40～50cm、幅20～30cmの石を数個置いて閉塞しているが、敷石はこの手前まで施されており、それより開口部寄りには疎らにみられる程度である。この羨道部内の閉塞石は北壁と接する所では3段に積まれた状態であったが、他は最下段のみで、上部石材はその前後に散乱した状態であった。また、開口部には長さ65cm、幅35cmの石が1個みられ石室全体を閉塞した形になっている。羨道部にみられるこれらの閉塞石は本来何段か積まれることにより機能を果していたものと考えられる。

なお、石室前面の列石は羨道部の側壁と連続しており、検出された長さは北側が2.5m、南側が3.5mであった。

出土遺物 21号墳の調査において出土した遺物は、石室内から古墳時代の須恵器5点(杯2点、蓋3点)・鉄鏃3本、耳環1個があり、それ以外には墳丘東側の斜面から平安時代の土師器皿2点が出土している。また調査区内の南西隅には以前調査を実施した20号墳の一部を検出しているが、その20号墳の周溝内で当時木の根があるため調査できなかった部分があり、今回それを除去したところ、その個所から須恵器壺2点が出土しているので今回合わせて報告する。

〔遺物出土状況〕 21号墳の石室内より出土した遺物の内訳は、羨道部から出土した蓋4以外はすべて玄室内から出土したものである。まず玄室内でみつかった遺物の出土状況

をみると、北西隅にあたる北壁と袖石とのコーナー部から杯1・2、蓋3が完形で出土している。またこの3点とほぼ同じ位置から蓋が1点出土しているが、これは小破片であった。完形で出土した杯及び蓋の3点はすべて口縁部を上

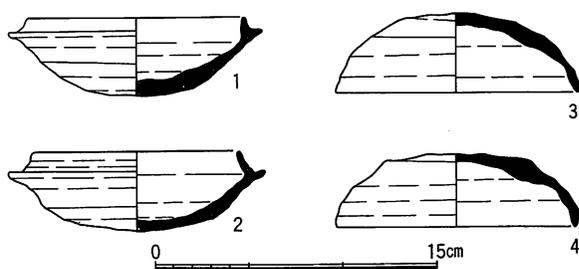


図6 御堂ヶ池21号墳出土須恵器実測図

した状態でみつかっており、小破片のものも含め2次的に移動している可能性が強い。鉄鏃3本は南壁と袖石とのコーナー部付近から出土しており、耳環は奥壁付近の北壁から50cmの所で出土している。羨道部においては、玄室から1.6mのやや北壁寄りの所で蓋(4)が1点出土したのみである。

〔出土遺物〕 杯(1・2)には底部にヘラケズリをするもの(2)としないもの(1)とがある。前者はたちあがりの内傾度が大きく、受部は外上方へのびる。底部は扁平でヘラケズリの面積は約1/3である。色調は灰色を呈しており焼成状態は良い。法量は口径11.0cm、器高4.2cmである。後者はたちあがりがかかなり低く、底部はヘラ切りのまま不調整である。色調は淡灰色を呈しており、焼成状態は悪い。

蓋(3・4)2点は口径が共に12.8cmである。天井部と口縁部を分ける稜線はみられず全体に丸味をもっている。焼成状態は悪い。

鉄鏃 出土した鉄鏃は総数3本で、その形態は鏃身がややぶ厚く両側に刃をもつもの(1・2)と鏃身が薄く先端部分に刃をもつもの(3)とがある。頸部、茎部の断面はほぼ正方形を呈し、その境には棘状突起がみられる。また茎部表面には矢柄に装着する際、すべり止めの役目を果たしたと考えられる繊維の筋が観察された。全長をとどめるものはなかったが、比較的残存状態の良好なもの(1)で長さ16.7cmを測る。

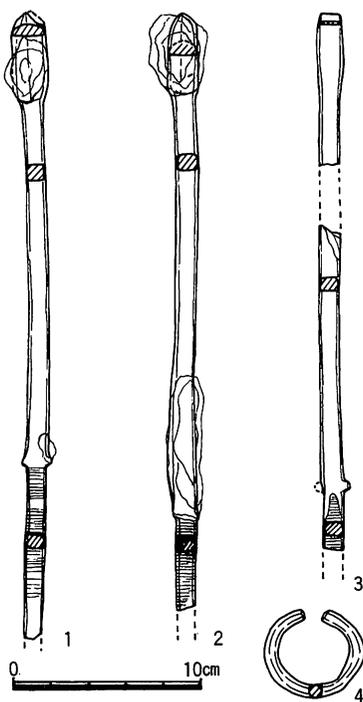


図7 御堂ヶ池21号墳出土鉄鏃・耳環実測図

耳環 1点出土しているが、表面の破損が著しく

全体に縁青がふき出しているため、現状では金貼りか銀貼りかは不明である。

〔20号墳出土遺物〕 20号墳の周溝から須恵器壺が2点出土している。1点は長頸壺(1)で、もう1点は短頸壺(2)である。長頸壺は口径8.0cm、器高16.2cmで、最大径が体部中央にあり、12.2cm

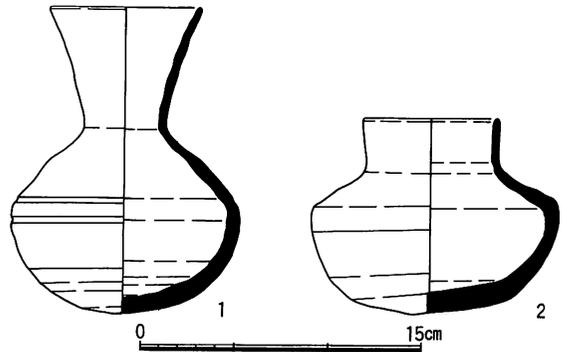


図8 御堂ヶ池20号墳出土須恵器実測図

を測る。この体部中央付近には2条の凹線をめぐらしている。短頸壺は口縁部が短かくたちあがるもので口径7.2cm、器高10.2cm、肩部に最大径があり、13.2cmを測る。

3 御堂ヶ池26号墳

墳丘 御堂ヶ池26号墳は20・21号墳の南側にみられる南北に長い尾根と、そこから延びる東西の短い尾根のくびれ部に位置している。墳丘の東西方向はゆるやかな登り斜面になるが、南北方向は谷筋にあたるため下り斜面になる。この26号墳は墳丘の北側約半分を調査前に削り取られたため、全容を明らかにすることはできなかったが、調査によって直径約11cmの円墳であることが明らかになった。なお墳丘高は1.6mを測るが、現状における墳頂部は墳丘の中央よりもやや北寄りにある。

東西及び南北に設定した断ち割りトレンチにより墳丘の構築状態を調べると、まず地山ラインは西から東に下っており、墳丘東側周溝からさらに東へ約1mの所が最も低所で、そこから東へは地形に沿ってまた上っていく。この地山は墳丘の所では盛り上りを形成しており、墳丘を構築するにあたって、まず、墳丘周辺の地山を削り込んでいることが想定される。墳丘を構成する封土は約50cm程残っていた。この封土は墳丘のベースとなる地山の淡赤褐色砂泥層を主体とするもので、石室の構築に伴い、盛り上げられた様子が観察された。

石室に直交する南北トレンチにおける石室掘り形の規模は肩部で幅3.3m、深さ0.7m掘り形底面の幅約1.8mを測る。また周溝は同じく石室直交ラインで幅1.7m、深さ0.2mを測る。

内部構造 本古墳の主体部は横穴式石室で、ほぼ東に開口している。床面を検出した状

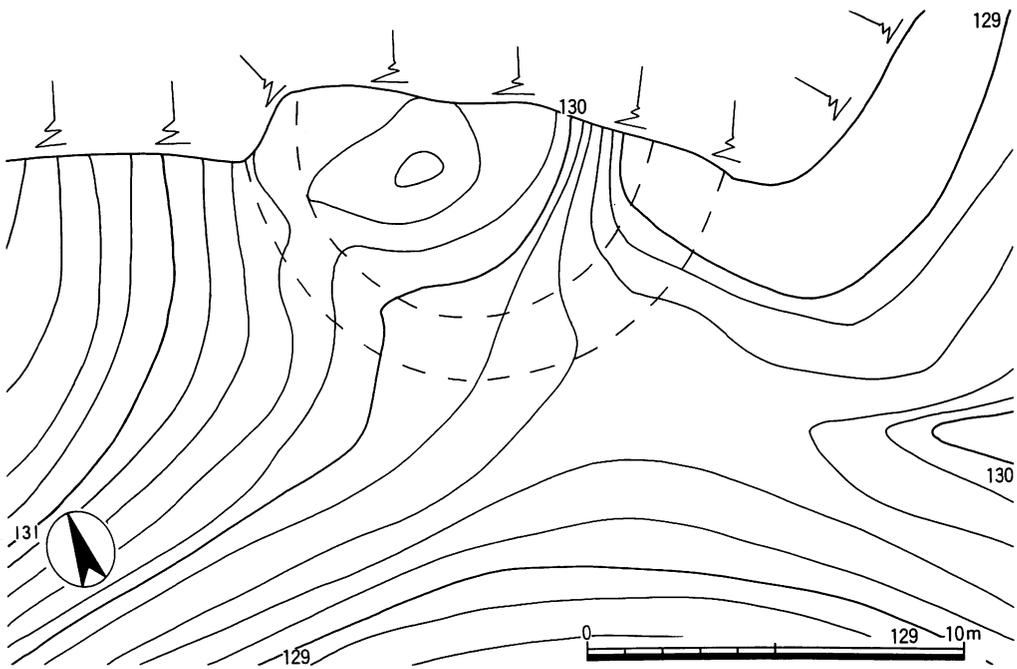
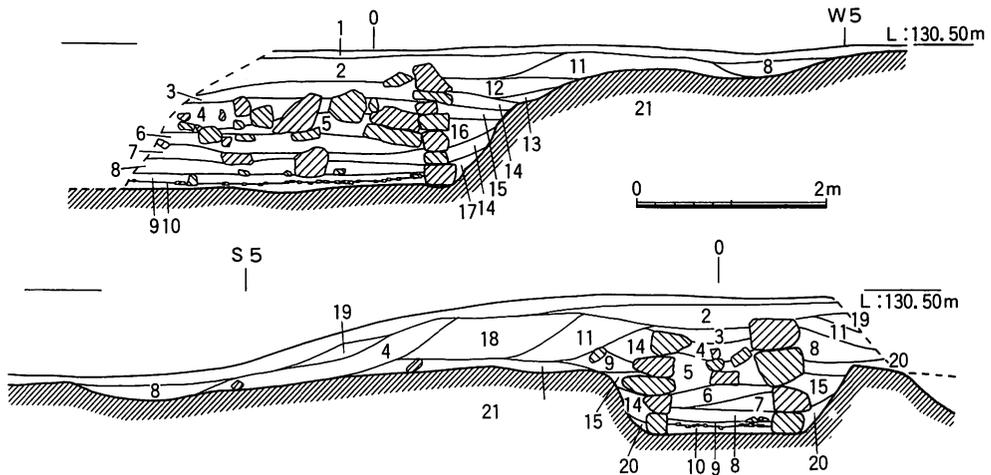


图9 御堂ヶ池26号墳調査前墳丘測量図 (1:200)



- | | | |
|-------------|--------------|---------------|
| 1 表土 | 7 暗褐色泥砂 | 13 暗赤褐色泥砂 |
| 2 淡茶灰色泥砂 | 8 暗黄褐色砂泥 | 14 明黄褐色砂泥 |
| 3 明黄褐色粘質土 | 9 淡赤褐色泥砂 | 15 暗茶褐色砂泥 |
| 4 黄灰色泥砂(礫混) | 10 暗黄褐色泥砂 | 16 茶褐色泥砂(礫混) |
| 5 暗黄灰色泥砂 | 11 淡茶褐色泥砂 | 17 黄灰色砂泥 |
| 6 淡灰褐色砂泥 | 12 黄褐色泥砂(礫混) | 18 明黄灰色泥砂(礫混) |
| | | 19 茶灰色砂泥 |
| | | 20 赤褐色砂泥 |
| | | 21 淡赤褐色砂泥 |

图10 御堂ヶ池26号墳墳丘断面図 (1:100)

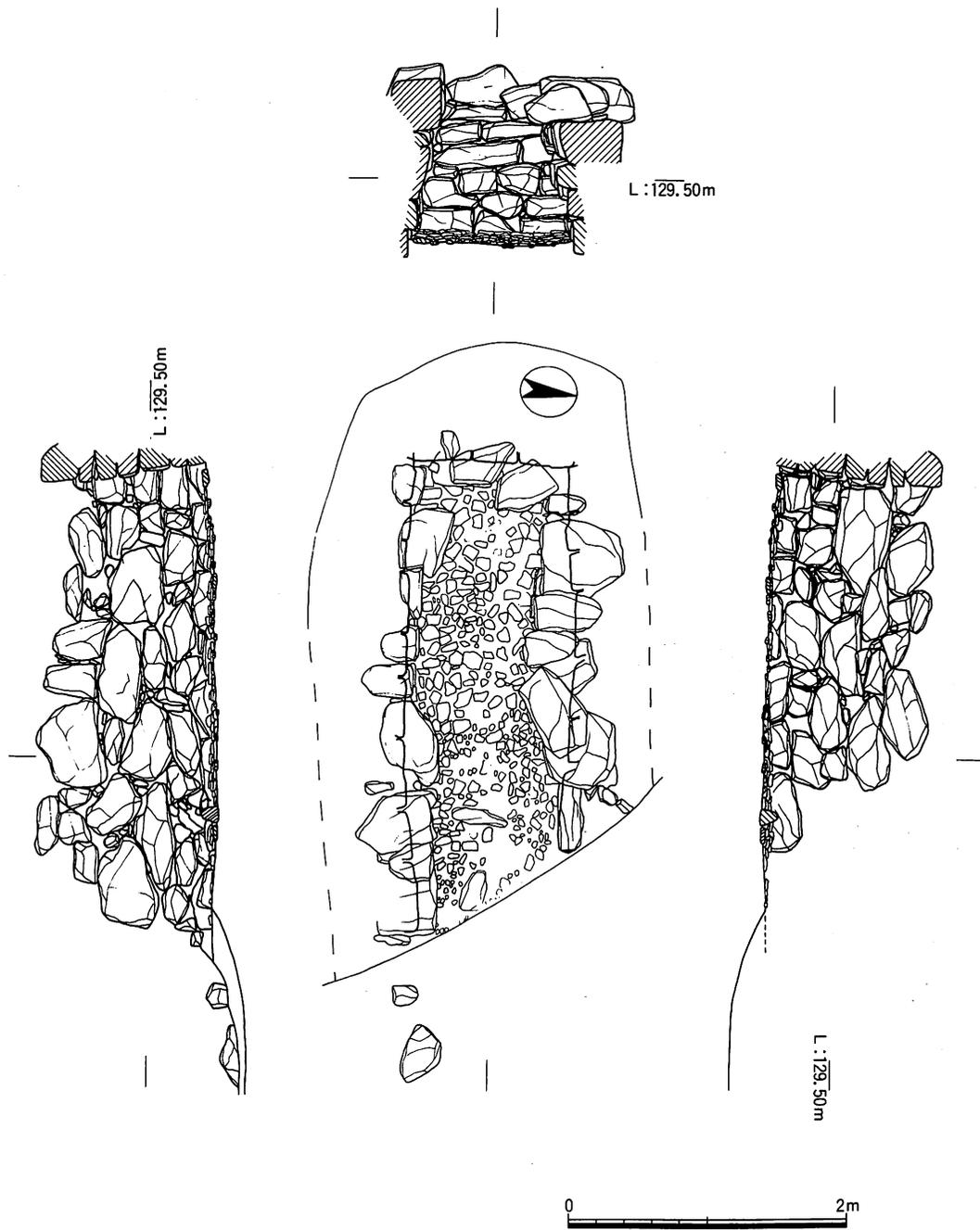


図11 御堂ヶ池26号墳石室実測図 (1:50)

態での石室規模は、残存長が3.5mで、幅は奥壁付近で1.1m、奥壁から2.7mの所で1.04mを測る。

この石室の形態に関しては、検出された範囲内に玄室と羨道部とを分ける袖部がみられないことや、幅も1m前後であること等から判断すると、無袖式である可能性が強い。

床面に施された敷石は、検出された床面のほぼ全面にみられるが、密度は疎い。

石組みの状態は全て横積みで、持ち送りにより構築している。現状では、奥壁において7段まで残っており、高さは1.2mを測る。石材の大きさは、最下段及び2段目が、長さ30~40cm、幅20cm前後のものを多く使用しているの比べ、3段目以上においては、長さ50~70cm、幅30~40cmのやや大型のものを多く使用している。石室内の埋土には、石室に使用されたと考えられる石材が多数転落していた。石室に使用された石材の種類はチャートである。

出土遺物 発掘調査時における出土遺物はなかったが、調査前の重機による造成の際に出土したと思われる須恵器蓋1点を石室前面で採集している。

この蓋は天井部に粗いヘラケズリを施すもので、天井部と口縁部とを分ける境界には鈍い稜をもち、口縁端部は内側が浅く凹む。

4 小 結

御堂ヶ池古墳群は嵯峨野の背後を画する丘陵の谷間に立地している。群中の古墳はすべて円墳であり、その規模は直径30cmを測る1号墳以外は大半が直径10m前後の小円墳である。その中で直径16mを測る21号墳は比較的大きな規模をもつものといえる。21号墳に接して西側にみられる20号墳の直径は9mであった。この墳丘の規模だけでみた場合、西側斜面に立地する21基の中でも裾部にみられる17基は、1号墳を除き全てが直径10m前後の

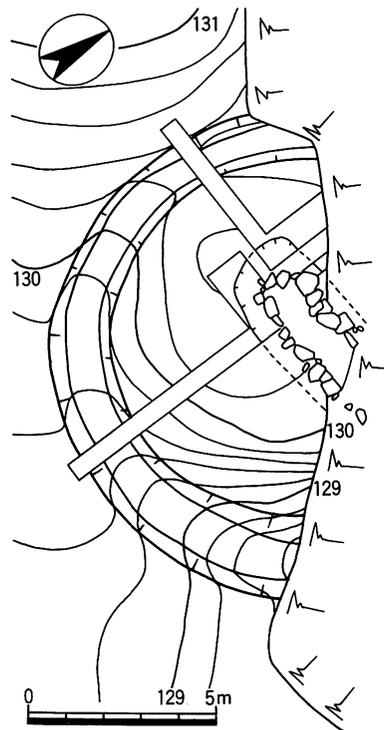


図12 御堂ヶ池26号墳調査後
墳丘測量図



図13 御堂ヶ池26号墳出土
須恵器実測図

小円墳であるのに比べ、斜面上部や尾根上に立地する4基のうち3基が直径15m前後の規模をもつものという特色を示している。なお他の古墳とはやや離れて20・21号墳の南側の丘陵上に築かれた24～26号墳の墳丘規模は直径10m前後である。21号墳の石室開口部にみられる列石は、隣接する20号墳にもみられるが、20号墳における列石は開口部前面にも連続しており、21号墳のように開口部の両側壁から八字形に開く形態は、西側斜面に築かれた12・13号墳における列石のあり方に類似するものである。

調査を行った2基の古墳の内部構造は横穴式石室で、21号墳は両袖式、26号墳は無袖式のものであった。21号墳の石室床面の平面規模は、本古墳群内で調査された他の石室と比較した場合、最大の規模をもつ1号墳に次ぐものである。この21号墳の石室床面は、左右がほぼ対称の整った両袖式の形態を呈しており、その形態・規模に類似するものは、本古墳群内にはみられず、むしろ西京区の大枝古墳群内の4・15・20号墳の石室をあげることができる。

26号墳は、幅1mの無袖式石室であり、その形態・規模は本古墳群内の12・26号墳に類似するものである。この無袖式石室の床面幅は、本古墳群内で調査を行った両袖・片袖式石室の羨道部床面規模とほぼ一致しており、1m前後の幅をもつことが横穴式石室という形態を維持する限度になるものと考えられる。

出土した須恵器をみると、21号墳では杯・蓋の底部及び天井部は不調整で、杯受部のたちあがりも非常に短い。粗いヘラケズリを施す杯も1点出土しているが、その調整は雑なものであり、7世紀前葉の年代が考えられる。26号墳では、出土遺物が全くみられず、調査以前に削り取られた石室内のものと思われる須恵器蓋1点を石室前面より採集しているにすぎない。この蓋は天井部に粗いヘラケズリを施すものであるが、天井部と口縁部とを分ける境界は鈍く、その年代は21号墳出土須恵器と同じ7世紀の前葉と考えられる。

今回調査を行った21・26号墳は、出土遺物でみる限りでは7世紀前葉に位置づけられるが、横穴式石室の形態としては最も退化したのと考えられる無袖式石室が多くなるこの時期に、21号墳のような比較的整った両袖式石室を内部主体とする古墳が築造されるという現象は、6世紀後半以降において、丘陵部に小円墳を主体とする古墳群が築造される一方で、平野部には前方後円墳が築造されるという現象と共通するものがあり興味深い。

注1 『御堂ヶ池群集墳20号墳発掘調査報告』 六勝寺研究会 昭和49年

注2 『埋蔵文化財発掘調査概報』 「御堂ヶ池群集墳発掘調査概要」 京都府教育委員会 昭和40年

注3 『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 昭和57年

第2章 音戸山西支群1・2号墳

1 調査経過

調査に至る経緯 御堂ヶ池21・26号墳の調査に入ってもなく、本支群の1号墳が樹木移転に伴う重機の掘削を受け、石室石材の大半が散乱するという事態になった。このため土地所有者と京都市埋蔵文化財調査センターとが協議を行い、急遽本古墳群の調査を実施することになった。

この音戸山古墳群における西支群は、『嵯峨野の古墳時代』（京都大学考古学研究会、昭和46年）では朝原山62～66号墳として報告されたものである。その位置は御堂ヶ池古墳群と音戸山古墳群のほぼ中間にあり、狭い谷間の西側斜面に4基が裾を接して南北に並んでいる。またこの4基の古墳と向い合う東側斜面でも1基が確認されていたが、今回周辺を踏査したところ、新たに3基の古墳を発見した。この地区におけるこれらの古墳はすべて円墳であり、その規模も直径がすべて10m前後であるという特徴をもっている。

調査経過 調査は周辺整備の後、西側斜面に南北に並ぶ1～4号墳の墳丘測量から開始した。古墳の調査は、樹木の移転により掘削を受けた1号墳と、この1号墳に隣接する2号墳の調査を実施した。まず1号墳の調査では、遺跡の保存を前提として墳丘断面の観察及び露出した石室部の調査を行った。2号墳は、墳丘頂上部付近に石室の天井部が露出しており、石室内には空洞部も一部確認され、いずれこの部分から石室の崩壊することが予想されるため、石室の残存状態の確認及びその保護を目的として調査を行った。このため調査は最少限度にとどめ、床面も石室内のトレンチにより検出した。なお調査終了後は、土納袋により埋戻しを行った。

2 音戸山西支群1号墳

墳丘 1号墳の墳丘規模は、墳丘北側の2号墳と接する周溝を検出したのみであるため、正確な寸法は不明であるが、過去の踏査記録やその地形から判断すると直径7mほどの円墳と考えられる。この1号墳は同じ並びにある4基の古墳の中では最も小規模なものである。

1号墳は北側を2号墳に接しているが、周溝内の堆積状態には切り合い関係は認められ

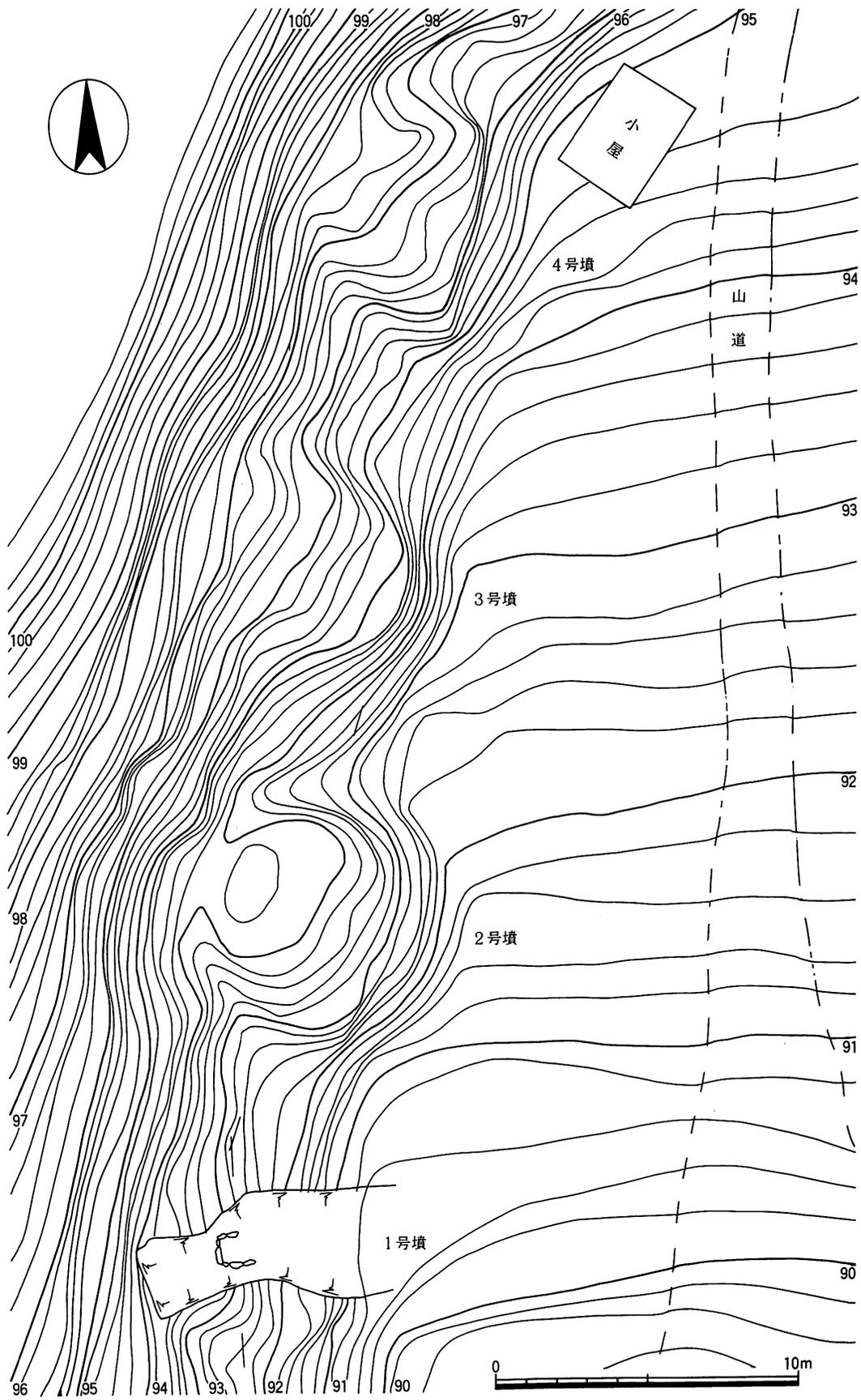


图14 音戸山西支群1~4号墳

なかった。墳丘の構築にあたっては、まず丘陵斜面を円形に掘り込んで構築面を造っている。墳丘の盛土は石室の構築に伴って行っているが、現状では墳丘中央部で約1mの厚さを測った。また2号墳と接する部分の周溝幅は3.5mを測る。石室を構築するための掘り形規模は、作図した横断面での肩幅約2m、深さ60cmを測る。なおこの掘り形は肩部から底部の間に段をもつ二段掘り形の形状を呈している。

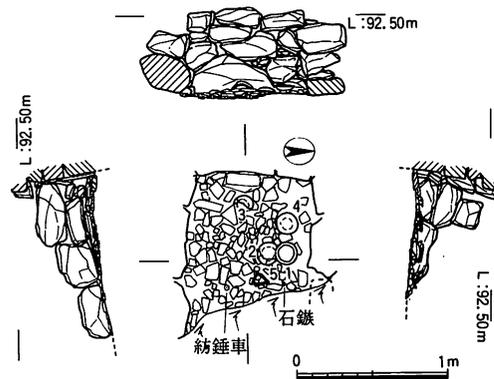


図15 音戸山西支群1号墳石室実測図(1:50)

内部構造 本古墳の内部構造は横穴式石室で東に開口している。樹木の移転に伴い石室の大半が削られており、全容は不明である。残存する石室の全長は約1mで、幅は奥壁付近で0.8mを測る。石室高は奥壁にみられる石積み4段が現状では最も高く、床面から55cmを測る。石組みの状態は、2石からなる奥壁最下段の南寄りの石材が縦積みをしている以外はすべて横積みを行っている。石材の規模は、上記の奥壁最下段南寄りの石材が最も大きく長さ60cm、幅30cmを測るが、その他の石材では、長さ20cm前後のものや30cm前後のものが多い。石室に使用された石材の種類はチャートである。

次に床面をみると、検出した床面にはほぼ全面に拳大の石材による敷石が施されており、奥壁寄りには、長さ28cm、幅10cmのやや大きい石が1石みられる。

遺存する石室の範囲内では、袖部の有無は不明であるが、石室の幅が1mにも満たないことからみて無袖式の可能性が強い。

出土遺物 本古墳から出土した遺物はすべて石室内のものである。その内、古墳時代のもは須恵器6点(杯2点、蓋2点、壺2点)と紡錘車1点であり、その他に古墳時代以前の石鏃が1点出土している。

〔遺物出土状態〕 出土した遺物は石室奥壁付近のものであり、古墳時代以前の石鏃も含め、すべて床面直上から出土している。

杯(1・2)は北壁寄りの所から重なって出土しているが、杯(2)は口縁を下に向けた状態であった。またそのすぐ奥壁寄りから蓋(4)が出土し、やや離れた奥壁のほぼ中央において蓋(3)が出土している。奥壁から約70cmの所で出土した壺(5・6)は細か

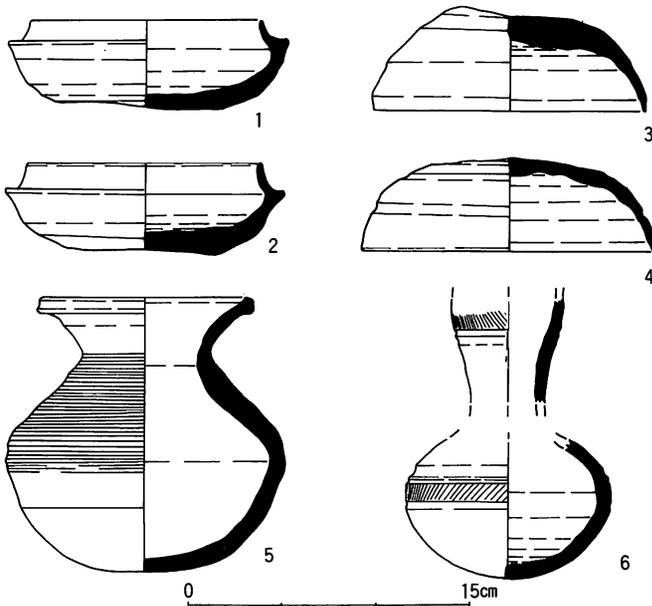


図16 音戸山西支群1号墳出土須恵器実測図

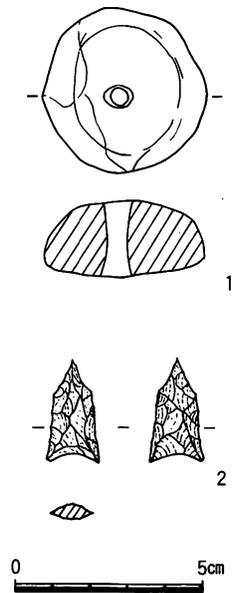


図17 音戸山西支群1号墳出土
紡錘車・石鏃実測図

く破砕した状態であった。

〔出土遺物〕 杯（1・2）は底部に粗いヘラケズリを施すもので、ちあがりは内傾し、受部は外上方へのびるが、やや短く先端は丸味もっている。法量は2点ともほぼ同じものであり、口径12.2cm、器高4.5cmを測る。

蓋（3・4）も、ほぼ同じ法量であるが、蓋3は4に比べ天井部の断面がかなり厚い。天井部と口縁部とを分ける境界はともに鈍く蓋4には浅い凹線がみられる。

紡錘車は、土製のもので、表面の摩滅が著しい。直径4.4cm、厚さ2cmで、中心の貫通孔は、直径0.5～0.8cmを測る。

石鏃は五角形の底辺をくぼませたもので、全長2.5cm、最大幅1.5cm、重量1.2gを測る。

3 音戸山西支群2号墳

墳丘 2号墳は同じ並びにある4基の古墳の中で最も良好に墳丘形態をとどめており、墳丘の頂上には天井部の石材が露出し、石室内には一部で空洞部もみられた。

現状での墳丘規模は南北の直径が周溝心々間で8.5m、墳丘高2.5mを測る。墳丘の構築は1号墳同様斜面を切り込んで平らな面を造り、石室掘り形の掘削を行い、石室の構築に伴って盛土を行っている。

封土は、高さ約1m残存しており、3・4回に分けて盛土している様子がわかる。石室を構築する掘り形は、淡赤褐色土層の地山を切り込んで造られており、その規模は、作図した横断面で肩口の幅が3.6mを測る大型のものであった。なお、墳丘を構築する際の地山面は、前述のように斜面を平らに整形してつくられているが、全体の地形に左右されて、横断面では南へ低くなっており、この石室掘り形の肩口も南側は北側に比べ約50cmほど低くなっている。また同じく周溝についても、3号墳と接する墳丘北側の部分と、1号墳と接する南側の部分とでは周溝底部の高さに1.3cmの差をもっている。

内部構造 本古墳の内部構造は無袖式の横穴式石室で東南東方向に開口している。石室内の調査では床面近くまで掘り進んだところ、奥壁部に遺存する天井石、南側壁が倒壊する危険が生じたため、その段階で実測及び写真撮影を行い、床面の調査は横断主軸に沿う幅10cmの確認トレンチにとどめた。そのため床面平面図は、奥壁から1.7mの所までは床面から約40cm、それ以外は床面から約10cm上部での平面図となっている。平面図を作成した状態での石室規模は、全長5.5mで、幅は奥壁で1.3m、開口部付近で0.7mを測る。天井石のみられる奥壁付近での石室内の高さは、1.5mを測るが、横断面で確認した床面から測ると同じく天

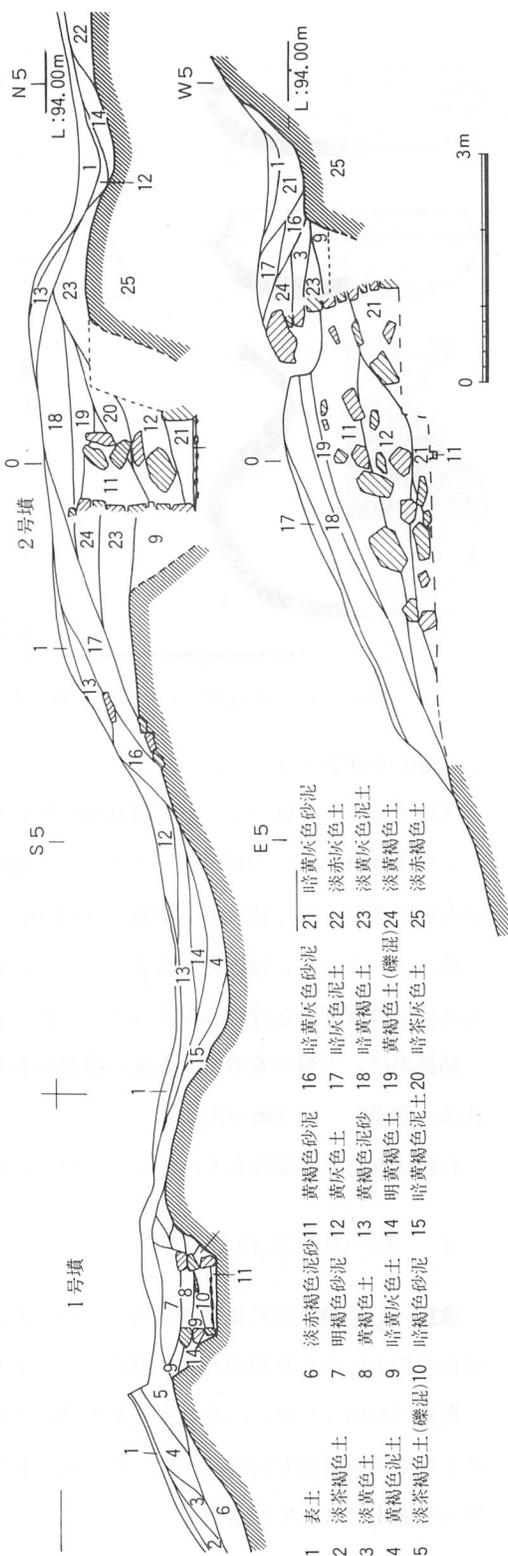


図18 音戸山西支群 1・2号墳墳丘断面図 (1:100)

井石までの高さは約1.8mとなる。石室の形態は無袖式である。奥壁附近と開口部附近とではその幅に倍ほどのひらきがあることからみて、明らかに玄部室と羨道部とを意識していることがわかる。

石室の遺存状態は、奥壁及び南壁が良好であるのに比べ、北壁に関しては、奥壁附近を除き大半の石材が石室内に倒壊していた。これらの石室内に落ち込んだ石材はかなりの量にのぼり、なかには大型石材も数点含まれていることからみて、石室全体に天井石が架構されていたものと考えられる。

石室に使用された石材の規模は大半が長さ50~60cm、幅20cm前後であるが、現状においては奥壁部にかかる天井石と北壁の奥から4列目最下段石が最も大きく、ともに長さ約90cm、幅約70cmを測る。壁面全体をみた場合、奥壁及び南壁に使用された石材の規模がほぼ均一であるのに比べ、北壁に関しては、規模のばらつきがみられる。

石組みの状態は、基本的には石材を横積みに行っているが、北壁最下段の数石と南壁最下段の一石が縦積みを行っている。南壁にみられるこの縦積み石材は、長さ約60cm、幅40cmを測り、壁面のほぼ中央にあたる奥壁から3m前後に位置している。またこの石材は南壁に使用されたものでは最も大型であることからみて、袖部を意識して据えられた可能性が強い。なお石室に使用された石材はチャートである。

床面の検出は横断トレンチによって行ったが、検出された床面には10cm前後の板石による敷石が施されており、遺存状態は比較的良好であった。

出土遺物 前述のように床面の検出は一部分にとどめたため、出土遺物も須恵器2点(杯1点、蓋1点)であった。蓋は床面検出トレンチのほぼ中央において、床面より15cmほど浮いた状態で出土しており、杯はその南壁沿いの床面直上から出土している。ただしこの杯は口縁部を下に向けた状態であった。

杯・蓋はともにほぼ同じ法量で、杯が口径10.0cm、器高3.7

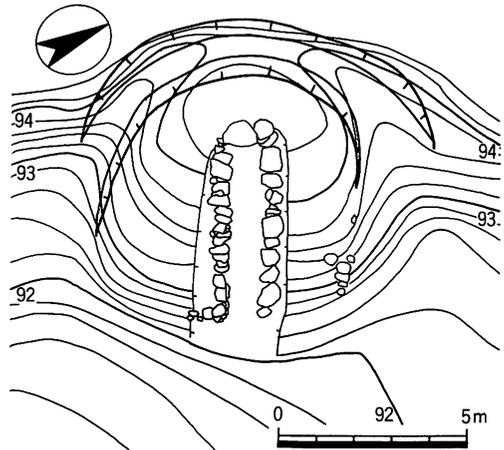


図19 音戸山西支群2号墳調査後墳丘測量図
(1:200)

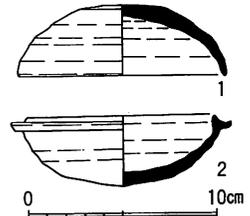


図20 音戸山西支群2号墳
出土須恵器実測図

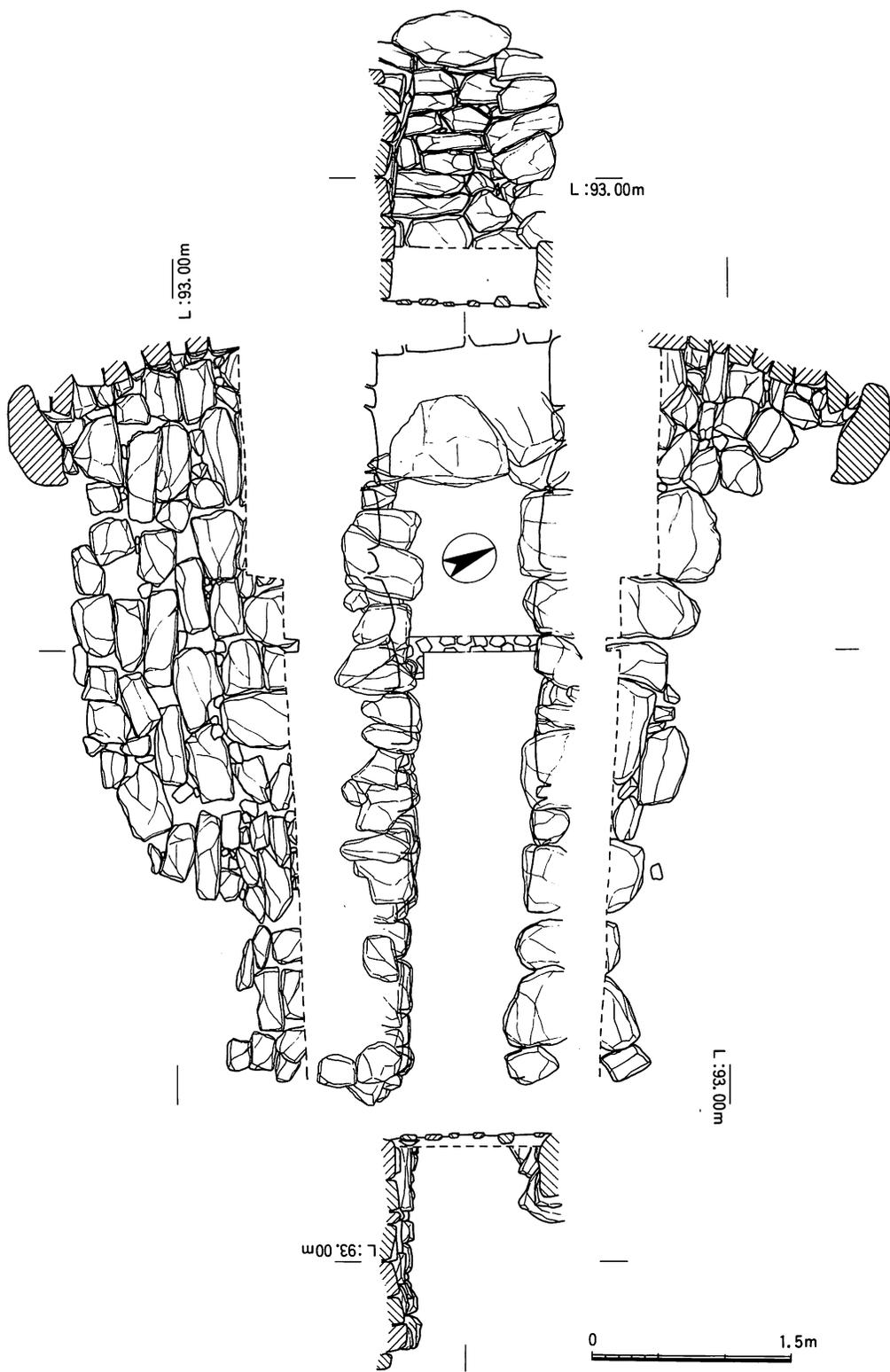


图21 音戸山西支群2号填石室实测图 (1:50)

cmであり、蓋が口径10.8cm、器高3.7cmである。全体に丸味をもっており、ヘラケズリはみられない。杯は色調が暗灰色を呈し、胎土に石英・長石の粒を多く含むのに比べ、蓋は、淡青灰色を呈し、胎土がきわめて精良である。焼成は杯・蓋とも良好である。

4 小 結

音戸山西支群は、御堂ヶ池古墳群と音戸山古墳群のほぼ中間にみられるの狭溢な谷間に立地している。現在までに8基の円墳を確認しているが、その分布については今後精査を要する地区である。

本支群を構成する8基の古墳はすべて直径10m前後の小円墳で、谷を挟んだ両側に4基ずつみられるが、今回調査を行った1・2号墳を含む西側斜面の4基は、それぞれ裾を接するように接近して営まれている。

調査を行った1・2号墳の墳丘規模は1号墳が直径7m、2号墳が直径8.5mで墳丘高はともに2.5mを測った。内部構造はともに幅1m前後の横穴式石室で、2号墳は無袖式、また石室の大半が失われた1号墳に関しても無袖式と考えられる。全長5.5mを測る2号墳の石室は奥壁付近と開口部寄りでは、その幅に倍ほどのひらきがあり、南側壁では袖石に相当する縦積み最下段石材がみられ、その袖石の所から開口部にかけて石室の幅が一段と狭くなることからみて、完全な無袖式石室ではないことがわかる。

出土した須恵器をみると、1号墳のものは杯・蓋ともにヘラケズリがみられ、口径15cm、器高5cmと大きく、杯受部のたちあがりもやや高いものであり、6世紀後半の年代が考えられる。2号墳出土の須恵器はその法量、調整が御堂ヶ池21号墳出土の須恵器と同じものであり、7世紀前葉と考えられるが、石室内を完掘していないため、時期の異なる遺物が出土する可能性もあることを付け加える必要があろう。

出土須恵器でみた場合、今回発掘調査を実施した総計6基の中では、本支群1号墳出土のものが最も古い時期に位置している。この1号墳の石室は、幅0.8cmの無袖式石室と考えられ、嵯峨野地域における石室の形態変化を変えるうえで注意を要するものといえよう。

第3章 音戸山7・8号墳

1 調査経過

調査に至る経緯 昭和58年度に実施した音戸山古墳群の発掘調査では、音戸山3・4・5号墳の発掘調査を行ったが、これと合わせて実施した周辺地形の測量調査では、その西側の丘陵斜面で新たに2基の古墳を発見し、これを7号墳・8号墳と名付けた。2基の古墳はいずれも直径10m余りの小規模古墳で、雑木林の中では目立たなかったために京都市の遺跡地図では登録もれとなっていた。

ところが、この7・8号墳の位置する丘陵斜面で新たな造成工事が予定され、事前に発掘調査を行う必要が生じた。調査の進め方については、京都市埋蔵文化財調査センターが原因者と協義を行い、実際の発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当して行うこととなった。

調査の経過 発掘調査は1984年10月中旬より開始し、1985年1月中旬に埋戻し作業を終え、現場での作業を完了した。調査手順としては、まず対象地全体の伐採から始め、これが終了した10月26日には関係者各位の御出席をいただき、慰霊祭を営んだ。

今回の発掘調査は「四分法」による全面調査で行うこととし、先に8号墳、次いで7号墳の順に調査を進めた。

8号墳では表土を排除した後、墳丘中央で攪乱層を検出し、これを掘り下げた。ここでは石室に落ち込んだ石材を多数検出し、これらを記録した後に取りはずした。次いで、石室床面上で原位置をとどめる石材4個と抜穴を多数検出し、これによって石室の形状をほぼ明らかにすることができ



写真1 調査風景（音戸山7号墳、北から）

た。

7号墳は7月中旬より調査を開始した。しかし、主体部は完全に破壊されており、石材や抜穴等はまったく検出できなかった。

11月末に両方の全景写真を撮り、以後石室実測と墳丘測量を行った。ところが、両古墳の周溝を精査したところ、本来はさらに大規模なものであることが判明し、8号墳においては墳丘前面に列石が存在することも判明した。これらを調査した後、2基とも墳丘封土をすべて排除し、墳丘基底面上で全景写真・墳丘測量を実施した。そして両方とも断ち割りを行って土層断面図を作成し、その後、埋戻しを行って現場での作業を終了した。

墳丘の状態 ここでは調査の過程で作成した3枚の測量図を示し、その内容について記す。

図23は、伐採終了時に作成したもので、発掘調査前の状態を示す測量図である。2基はともに墳丘が低く、中央部には盗掘墳とみられる凹みが存在している。8号墳に比べると7号墳の方が東西に細長く、この状態ですでに方墳であることが推定できた。しかし、8号墳については墳形が明瞭でなく、どちらかといえば南北に細長い円墳と考えることもできた。

図24は、墳丘上とその周囲の表土を排除し、主体部・周溝・攪乱墳等を掘り上げた時点で作成したものである。2基はともに

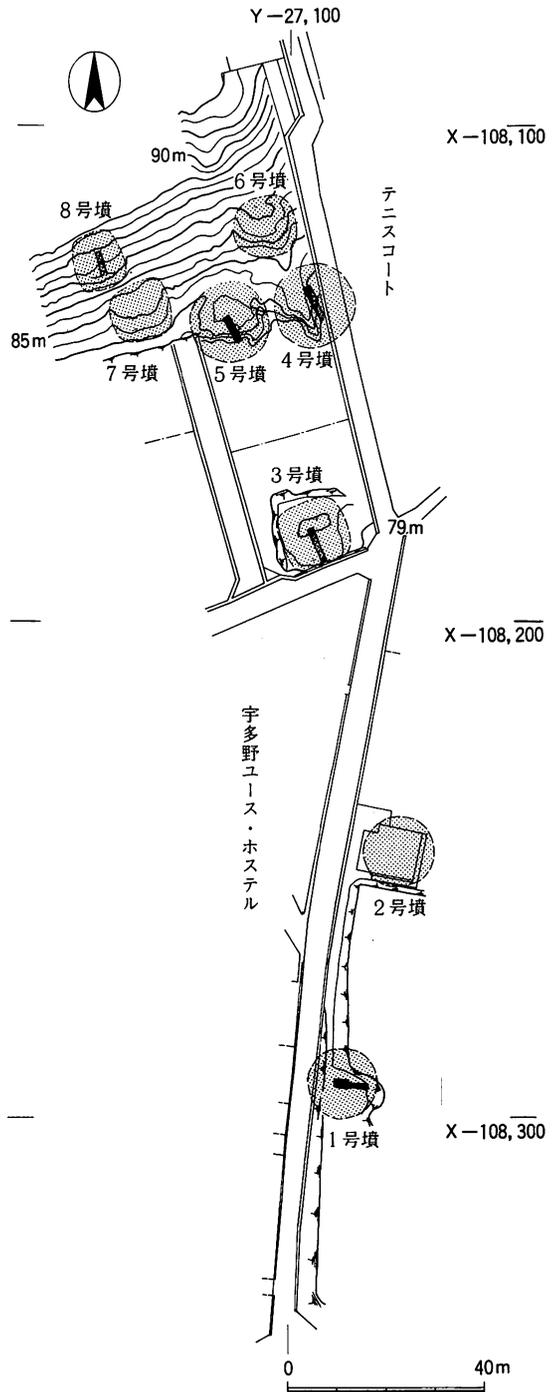


図22 音戸山古墳群位置図 (1 : 1,500)

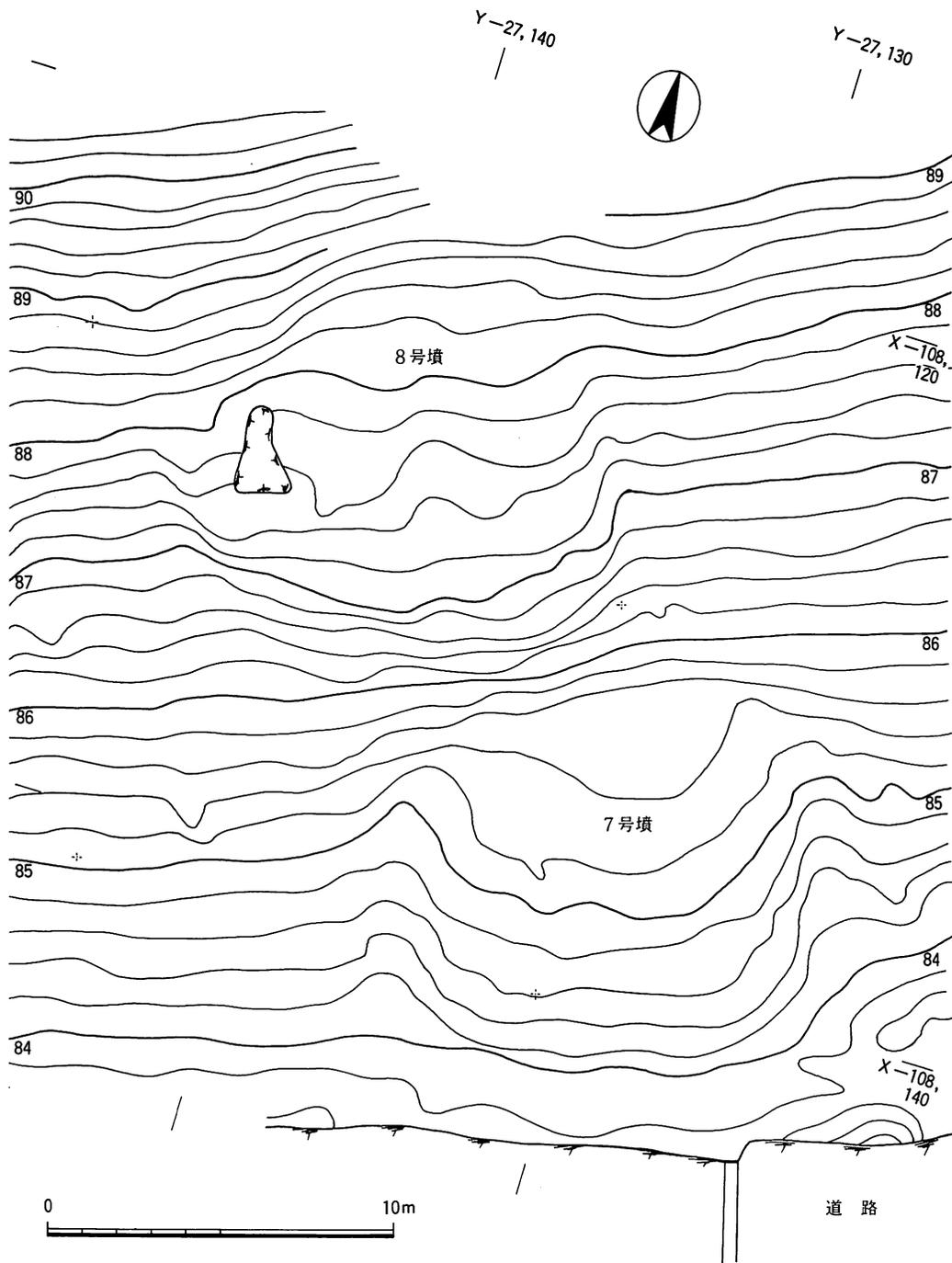


図23 音戸山7・8号墳墳丘測量図1 (調査前、1:200)

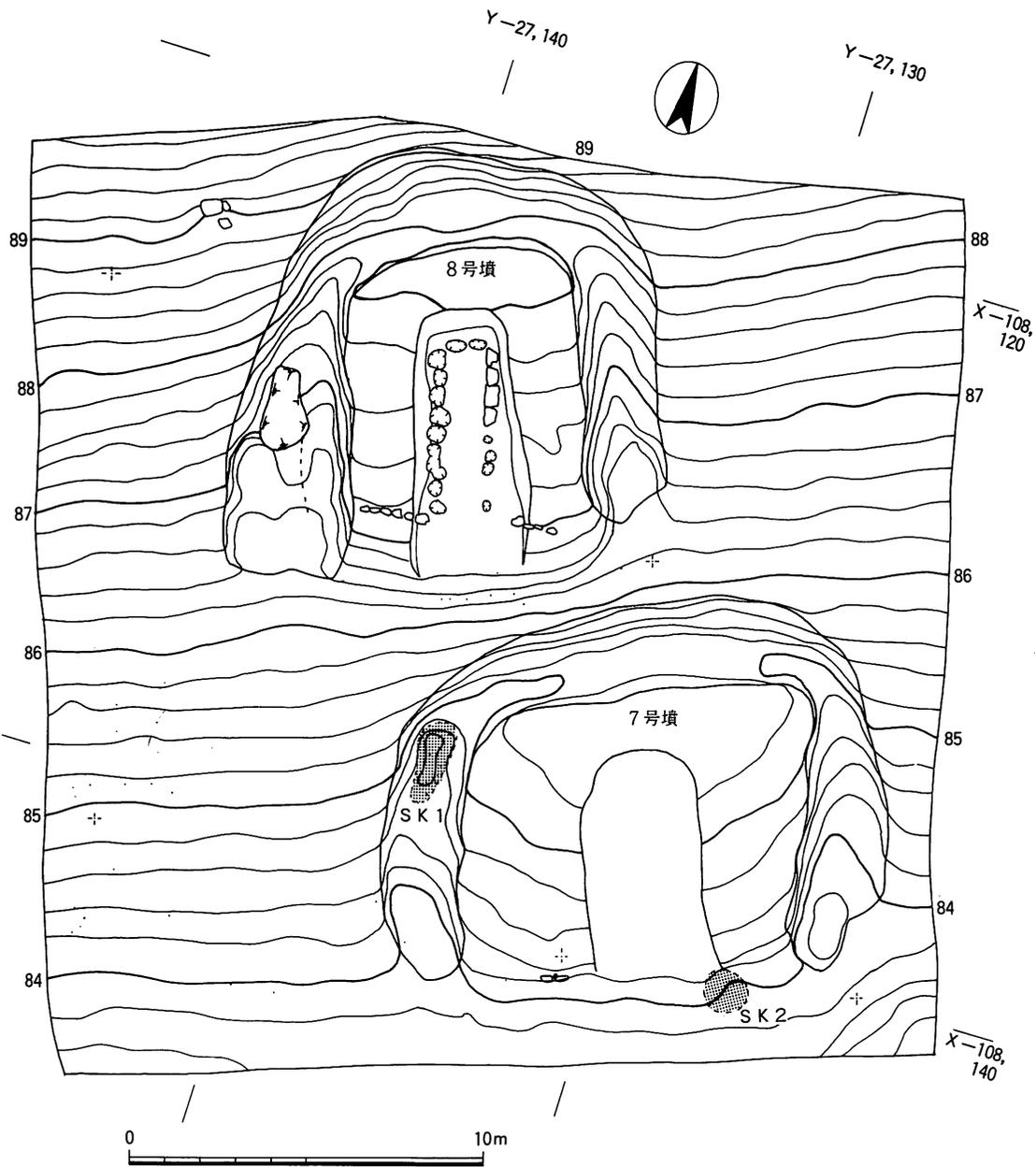


図24 音戸山7・8号墳墳丘測量図2 (表土排除後、1:200)

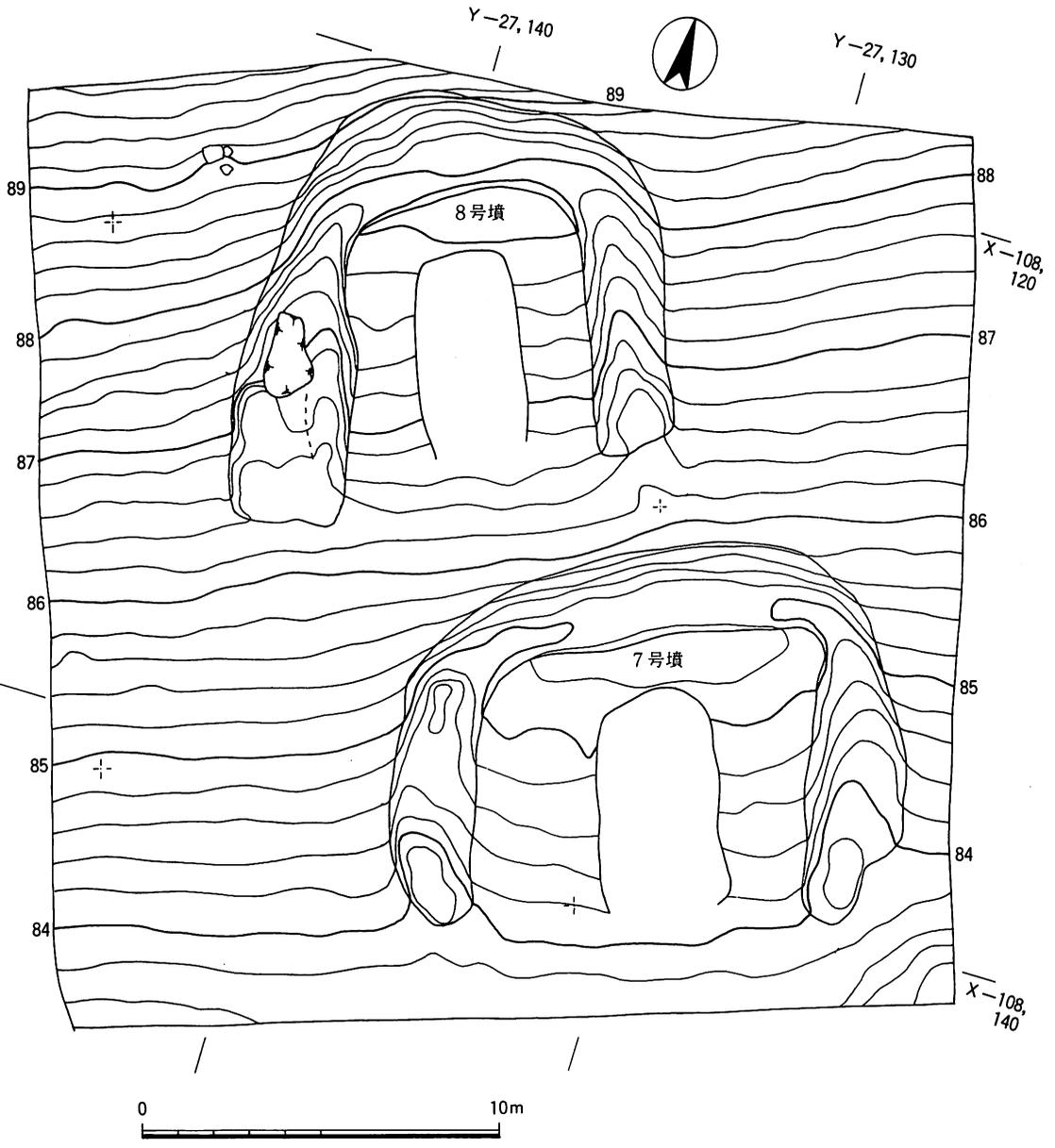


図25 音戸山7・8号墳墳丘測量図3 (封土排除後、1:200)

北・南・西の三方に墳丘とは不釣合な規模の周溝がめぐり、方墳であることが明瞭となった。周溝の形態はよく似ているが、墳丘は7号墳が東西に、8号墳が南北に細長い。8号墳の主体部は墳丘のほぼ中央に設けられており、地形の傾斜に従って南側を開口部としている。また、8号墳の開口部両側には列石がみられるが、その方向は石室主軸と正しく直交せず、西で北に振れていることもわかる。

図25は、両方の古墳の墳丘封土をすべて排除し、墳丘の基底面上で作成した測量図である。墳丘基底面は地山1とした赤褐色泥土層の上面にあたる。この泥土層は周辺の丘陵斜面にも認められるので、古墳が造られた当時の旧表土層に相当するものと考えられる。図24に比べると周溝や周辺地形に変化はないが、墳丘基底面上には等高線が横走しており、古墳を築造した当初の状態を知る資料として興味深い。

2 音戸山7号墳

墳丘 調査前には、東西12m、南北11m程度の規模をもつ方墳と推定された。墳丘の中央部が平坦であることから、すでに盗掘されていることも予想された。

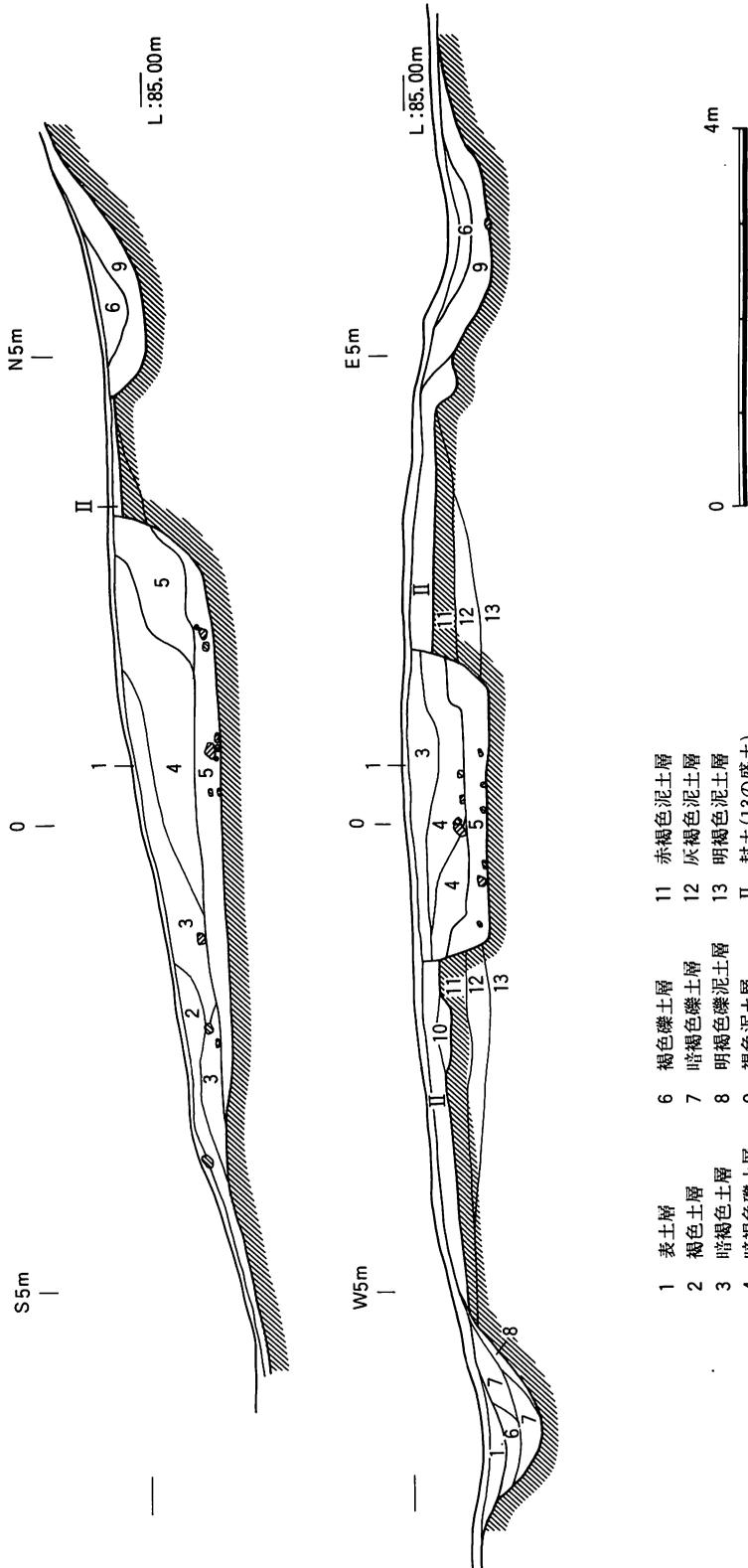
調査の結果、北・東・西の三方で周溝を検出し、方墳であることが判明した。墳丘の規模は東西の基底面幅が9.6m、周溝心々で東西12.0m、南北約11mである。その形状は北東方向に突出したややいびつな方墳といえる。

墳丘封土は極めて残りが悪く、最高で25cmを測るにすぎない。封土は地山の明褐色泥土層を主にして盛られている。

周溝は墳丘の北・東・西の三方を門型にめぐり、その規模は一様でなく、幅2.0～3.4m、深さ70～80cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は礫を含んだ褐色土層、下層は地山の赤褐色泥土層に類似した層であった。周溝の肩部は直線的に傾斜するが、底はゆるやかなU字形を呈する。周溝の両端部はいずれも一段深くなり、そのまま立ち上って消滅する。したがって、周溝は南辺部には連続しない。また、周溝底には凹凸があり、底のレベルも一定でない。特に北東隅においては長さ2m、幅90cm、深さ30cmの規模をもつ炭入りの褐色土層を埋土とする落ち込み（SK I）を検出した。

この他、墳丘南辺の裾部では、列石の残りともみられる石材を2個検出した。2個の石材はともにチャート製の薄い石材で、その平らな面を南に向け、長軸を立てるようにして据えられている。

内部構造 主体部と重複する攪乱墳は、長さ6.0m、幅3.4m、深さ70cmの規模をもつ。



- 1 表土层
- 2 褐色土層
- 3 暗褐色土層
- 4 暗褐色礫土層
- 5 明褐色土層
- 6 褐色礫土層
- 7 暗褐色礫土層
- 8 明褐色礫土層
- 9 褐色泥土層
- 10 明褐色泥土層
- 11 赤褐色泥土層
- 12 灰褐色泥土層
- 13 明褐色泥土層
- II 封土(13の盛土)

図26 音戸山7号墳墳丘断面図 (1:80)

その底部では石材や抜穴等はまったく検出できず、したがって本古墳の主体部はこの攪乱墳によって完全に破壊されたものと推定できた。この攪乱墳の南端では、原位置を失なった20個程の小石材を検出したが、これらは石室が破壊された際に開口部に堆積したものとみることができる。

この他、開口部の東南隅では平安時代の土壌(SK2)を検出した。直径1.2m、深さ35cmを有し、埋土及び底部から承和通寶が出土した。

出土遺物 整理箱1箱分の遺物が出土した。須恵器には、杯・蓋・高杯・壺等があるが、いずれも小片のため、図示できたのは図27の3点にとどまった。この他、SK2からは承和通寶が42枚出土している。

図27の1は口縁部の内面にかえりを有する蓋であるが、天井部のつまみを欠いている。内外面は横ナデシ、天井部はヘラケズリを施す。口径9.0cm。

2はその形態から杯として図示した。内外面は横ナデシ、底部外面はヘラ切りのまま不調整となっている。口径11.1cm、深さ3.3cmを測る。

3は口径6.7cm、器高10.1cm、体部最大径11.3cmを測る壺である。口縁部はわずかに外上方にのび、体部はやや肩が張る。その中位にくずれた凹線文を1条めぐらせる。

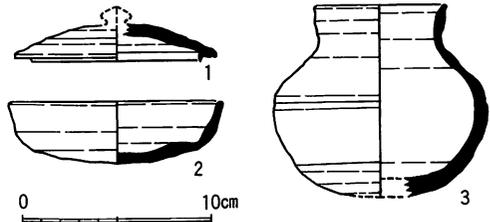


図27 音戸山7号墳出土須恵器実測図

体部下半はヘラケズリを施す。

なお、7号墳の墳丘中心より西へ約15m

の斜面上では、須恵器の破片が多数採集された。ここでは、杯・蓋・壺・瓶等の器形が認められたが、図示できたのは右図の4点である。4点とも須恵器杯で、3・4は法量が大きく、4は底部に高台を貼り付けている。各々の

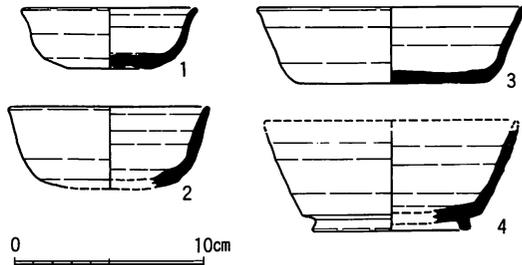


図28 音戸山7号墳西方斜面出土須恵器実測図

法量は以下のとおり。1 = 口径9.0cm、深さ4.4cm、2 = 口径10.4cm、深さ4.4cm、3 = 口径14.0cm、深さ4.0cm、4 = 高台径8.1cm。

3 音戸山 8 号墳

墳丘 調査前には、東西10.5m、南北11.5mの南北に細長い円墳と思われ、墳丘の中央部には盗掘墳とみられる凹みが存在していた。

調査の結果、墳丘の北・東・西の三方をめぐる周溝を検出し、方墳であることが判明した。墳丘の規模は東西の基底面幅が6.5m、周溝心々で9.5m、南北方向では北側の肩と南側の列石までで8.0mを測る。7号墳に比べるとやや小型で、しかも南北に細長い点で特色がある。

墳丘封土は残りが悪く、最高で35cmを残すにすぎなかった。墳丘の西半分では赤褐色泥土層を主とするⅠ層と明褐色泥土層を主とするⅡ層がみられたが、東半分、北半分ではⅡ層のみが認められた。

周溝は墳丘の北・東・南の三方をU型にめぐる。しかし、墳丘基底面が極めて狭いこともあって、墳丘には不釣合な規模に感じられる。周溝の規模は、幅平均1.5m、深さ40～50cmを有し、その両端部はともに1段深くなり、そのまま立ち上って消滅する。埋土は2層に分かれる。下層は暗褐色土層（7）、上層は明褐色礫土層（8）で、さらにこの上部には墳丘封土の崩れた層（明灰褐色土層、6）が堆積している。なお、当初はこの明灰褐色土層を墳丘封土の動いていない部分と考え、この上部に堆積する黄褐色土層（5）を周溝埋土として調査を進めていた。

列石は開口部の東側で4個、西側で6個認められた。石材の種類はすべてチャートであ

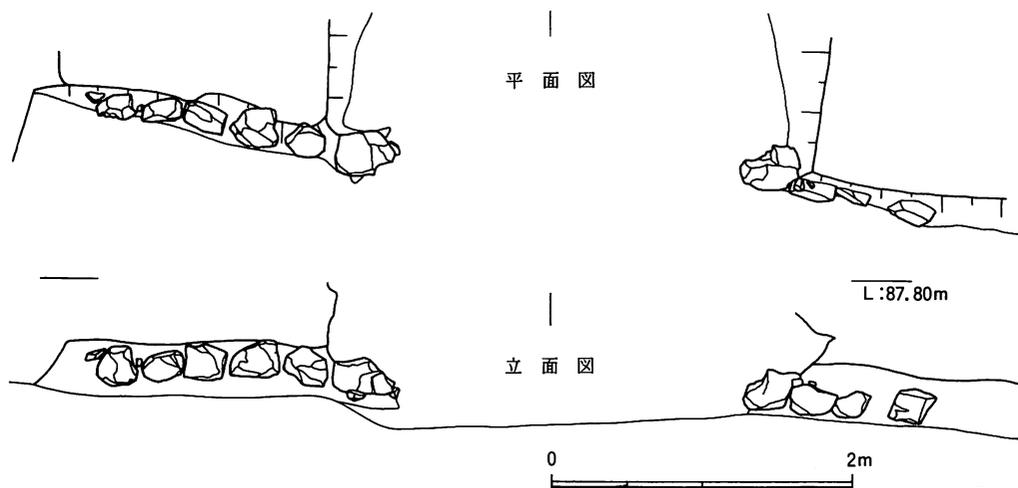
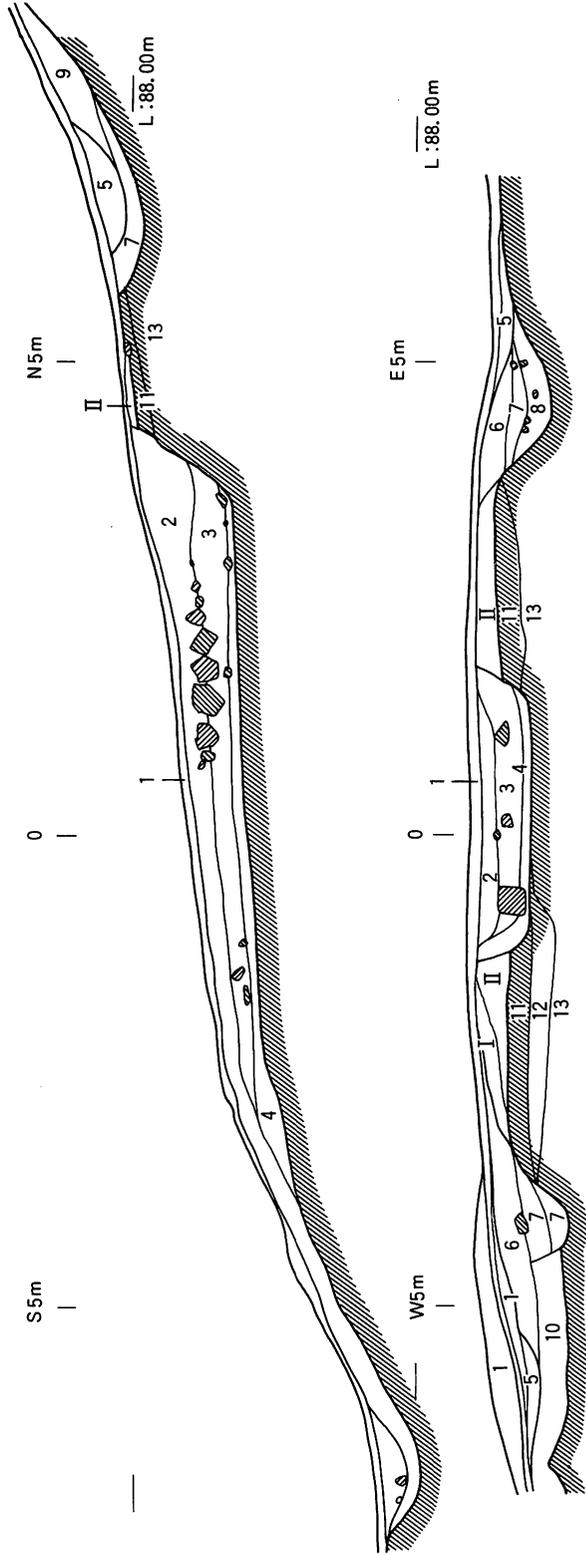


図29 音戸山 8 号墳列石実測図 (1 : 50)



- | | | |
|----------|-----------|--------------|
| 1 表土層 | 6 明灰褐色土層 | 11 赤褐色泥土層 |
| 2 褐色泥土層 | 7 暗褐色土層 | 12 灰褐色泥土層 |
| 3 暗褐色泥土層 | 8 明褐色礫土層 | 13 明褐色泥土層 |
| 4 明褐色土層 | 9 暗褐色土層 | I 封土(11の盛土) |
| 5 黄褐色土層 | 10 明茶褐色土層 | II 封土(13の盛土) |

図30 音戸山8号墳横丘断面図 (1:80)

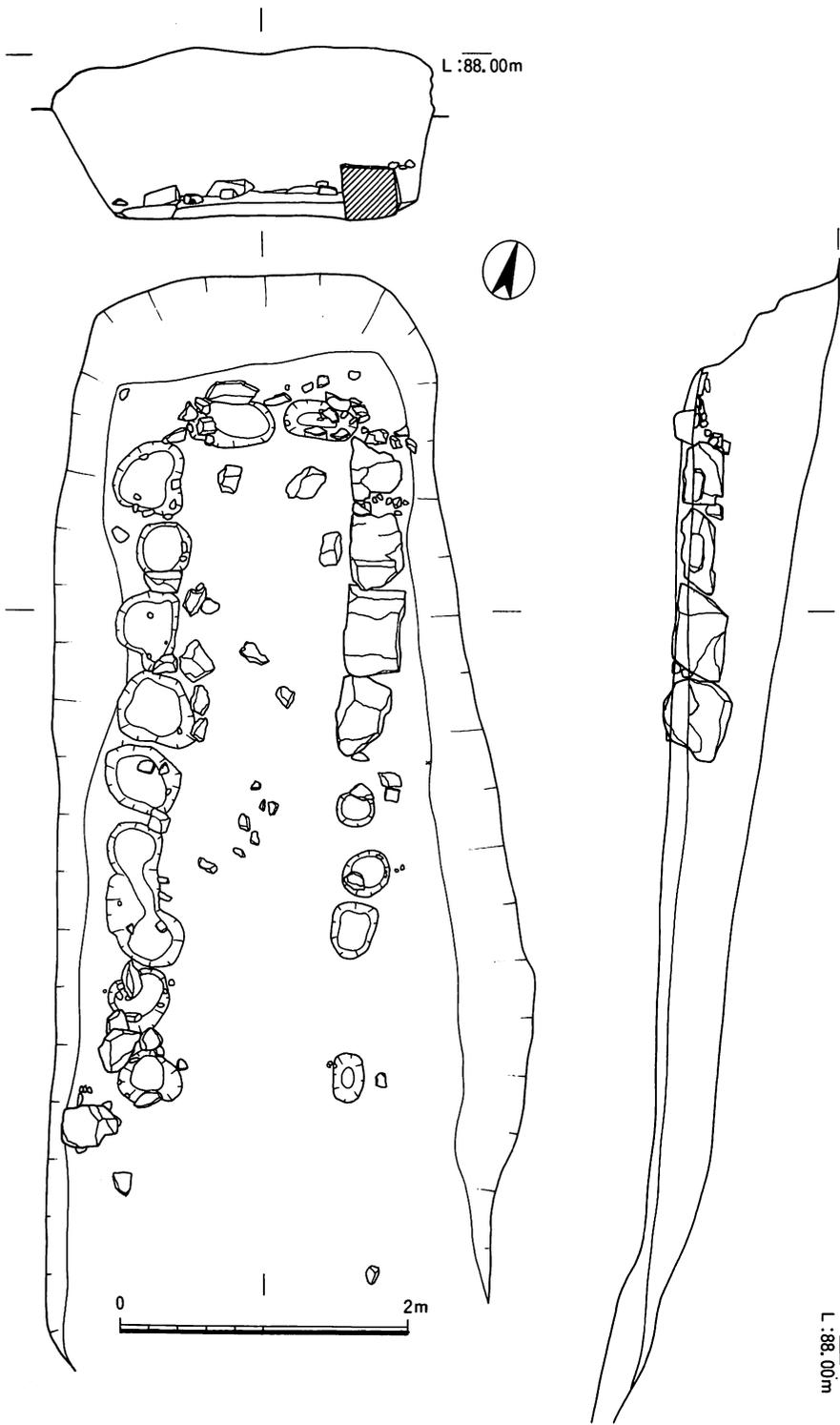


图31 音戸山8号墳石室実測図 (1:50)

る。その平らな面を外に向け、縦あるいは横方向に長軸を向けて据えられている。

内部構造 無袖式の横穴式石室を検出した。石室全長は4.8mあり、石室幅は奥壁付近で1.2m、開口部で1.05mを測る。

墳丘の中央部で、攪乱墳を検出し、これを掘り下げたところ、石室床面上で原位置をとどめた石材4個と、床面より浮いた状態の石材を多数検出した。このうち、石室の中央部では横倒し状態の側壁石材を5個検出した。原位置をとどめる4個の石材は、いずれもチャートで、その平坦面を内に向け、面を揃えて横積みしている。奥の2石より南側の2石の方が大きく、長軸方向で50~60cmを測る。これら4個の石材は、他の抜穴から判断して東壁の奥から4個目までの基底石に相当する。

この他、石室床面上では石材の抜穴を15個検出し、これによって石室の形態や規模を明らかにすることができた。

出土遺物 整理箱1箱分出土した。

須恵器・土師器が合計13個体分あるが、小片となったものが多く、図示できたのは右の5点にとどまった。これらは石室内(4)、周溝(3・5)、墳丘裾(1・2)から出土している。

1・2は口縁部の内面にかえりを有する須恵器蓋である。形態は1の方が扁平で、天井部には頭の平坦なつまみが付く。2はつまみの部分が欠損している。内外面とも横ナデの後、天井部外面をヘラケズリする。1は口径7.8m、器高1.8m。2は口径8.2m。

3は無蓋高杯の破片で、杯部上半と脚端部を欠く。杯部及び脚部には退化した凹線がめぐる。

4は台付長頸壺である。外反する長い口頸部と肩の張った体部、強く外方へ張り出した高台部からなる。口頸部

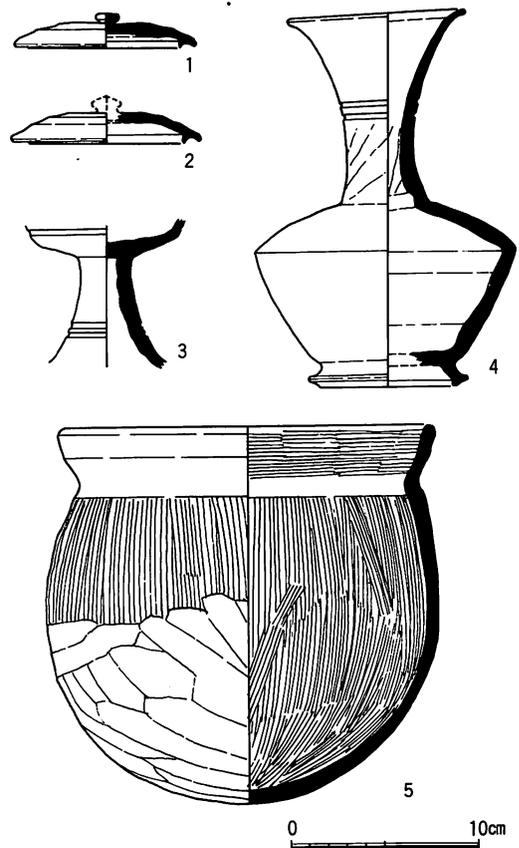


図32 音戸山8号墳出土戸須恵器・土師器実測図

の中央には2条の凹線がめぐり、その下方にはしぼり目が残る。口径9.2cm、器高19.7cm、体部最大径13.8cm、高台径7.1cmを測る。この台付長頸壺は石室開口部の床面からやや浮いた位置で出土したが、同一破片は7号墳の北側周溝からも出土している。

5は土師器甕で、西側周溝の立ち上り部で小片となって出土した。内外面はハケメ調整を施し、体部下半をヘラケズリしている。口径19.0cm、器高20.1cm、体部径20.8cmを測る。

4 小 結

墳丘 今回の調査では墳丘・石室の全面調査を行ったため、墳丘に関しては前回のトレンチ調査（3・4・5号墳）で得られなかった新たな知見を得ることができた。

その第1点は2基の古墳がともに方墳であることを明らかにした点である。当古墳群中に方墳が存在することは、すでに前回の3号墳の調査において明らかになっていたが、今回の調査では墳丘の三方で門型にめぐる周溝を検出し、その内容がより明確なものとなった。また、その細部に関しても、周溝端部の形態が共通する一方、墳丘基底面の形状や炭を含む土壌の有無等の差異も知ることができた。

その第2点は両古墳の墳丘前面で列石を検出したことである。群集墳の墳丘前面にこうした列石が存在することは、すでに各地で報告されているが、今回検出したものは石材を^{注1}一列に並べただけのものであり、本来の形態からみると著るしく退化したものといえる。

内部構造 8号墳では現存する基底石及び抜穴から、小型の無袖式石室が復原できた。同じ無袖式石室については、前回の調査で2例（3・5号墳）検出されているが、これらと比較すると、石室幅は3号墳とほぼ同じであるが、全長はかなり短かい点が指摘できる。

なお、当古墳群で知られる3基の無袖式石室は、いずれも奥壁側が幅広く、開口部が狭い点で一致しており、当古墳群を特色付けるものといえる。

出土遺物と年代 今回の調査では、内面にかえりをもつ須恵器蓋及びこれに組み合う杯（杯G）が多数出土しており、前回出土したような古墳時代に一般的な杯（杯H）はまったく認められなかった。最近の土器編年研究によれば、杯Gと杯Hは7世紀前半に共存するものの7世紀後半以降は杯Hが消滅、代って杯Gが主流をなすと考えられており、^{注3}出土須恵器の型式差だけでは古墳の前後関係を決めることはできない。しかし、7・8号墳から出土した杯Gの蓋は、かえりの位置やつまみの形状で後出的な要素もみられ、また8号墳の石室が3号墳の石室よりさらに小型化している点等からみると、今回調査した2基は前回調査したものよりさらに新しい段階に造営された可能性が高いといえる。

なお、8号墳から出土した台付長頸壺は、7世紀後半以降に盛行する特色を有しており、山城地方においても古墳からの出土はあまり例がない。ただし、この台付長頸壺は8号墳の石室開口部の床面よりやや浮いた状態で出土しているため、8号墳の被葬者を埋葬した時点で納められたものか、慎重な判断が必要といえる。

以上、墳丘が低く平坦で、方墳であること。墳丘基底面が極めて狭く、これに不釣合な規模の周溝が三方にめぐること。墳丘の前面に退化した列石をもつこと。小型化した無袖式石室を主体部とし、須恵器杯Gを主に出土することなどの特色は、両古墳が古墳時代の終末期に造営された古墳であることを示すものといえる。従来、このような古墳群については、山科区旭山古墳群^{注4}と伏見区醍醐古墳群^{注5}が知られるにすぎなかったが、古墳群が最も密集する嵯峨野地域でもこのような終末期に属する古墳群の存在を明らかにしたことは、山城地方における古墳時代の終末期の様相を理解する上で重要である。

注・参考文献

注1 群集墳の墳丘前面をめぐる列石については「外護列石」、「開口部列石」等呼ばれてきたが、機能的にみると墳丘の低い側を土留めするために施行された「葺石」の一種と考えることができる。事実、西京区大枝山古墳群では残りの良い14・22号墳等で5段程度の段積み状態が確認されており、通常はこれらの上半部が欠失して検出されることが多いため、先の名称を得たものと思われる。

※「大枝山古墳群」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

注2 京都市内では同様の例として、山科区旭山古墳群中のD-4号墳がある。この古墳も一辺約6mの方墳で、小型の無袖式石室を主体部としている。

※ 木下保明他『旭山古墳群発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第5冊 1981年

注3 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊 1978年

注4 注2に同じ

注5 『醍醐古墳群発掘調査概報』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 昭和60年度

圖 版



1 御堂ヶ池21号墳遠景（南東から）



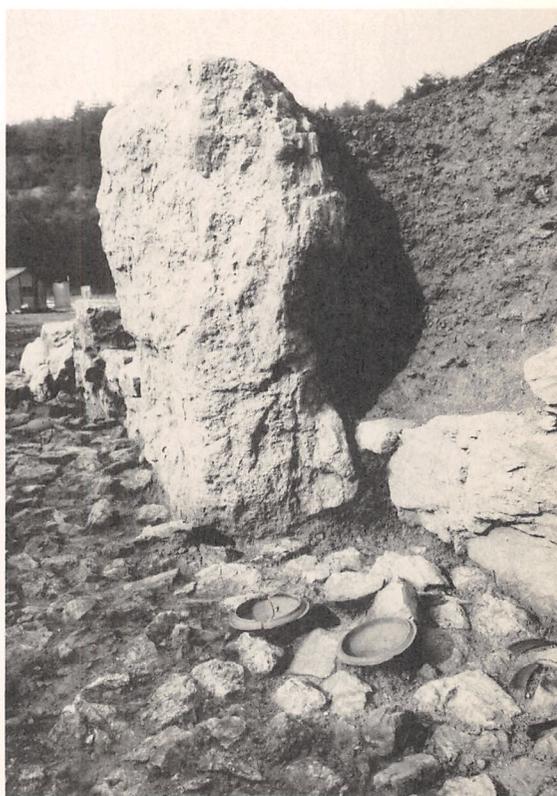
2 同 調査前全景（西から）



1 御堂ヶ池21号墳全景（西から）



2 同 石室全景（西から）



3 同 遺物出土状態（東から）



1 調査前全景（右から御堂ヶ池24・25・26号墳，北東から）



2 御堂ヶ池26号墳調査前全景（東から）



1 御堂ヶ池26号墳全景（北東から）



2 同 石室全景（北東から）



3 同 石室床面と奥壁（北東から）



1 音戸山西支群1～4号墳(左から1・2・3・4号墳,北東から)



2 同 1・2号墳調査前全景(左1号墳・右2号墳,東から)



1 音戸山西支群1号墳石室全景（東から）



2 同 遺物出土状態（東から）



1 音戸山西支群2号墳全景（東から）



2 同 南側壁（北から）



3 同 奥壁（東から）



1 音戸山7・8号墳遠景（中央左寄り，南西から）



2 調査前全景（左8号墳・右7号墳，南西から）



1 音戸山7・8号墳全景1 (手前が7号墳, 南から)



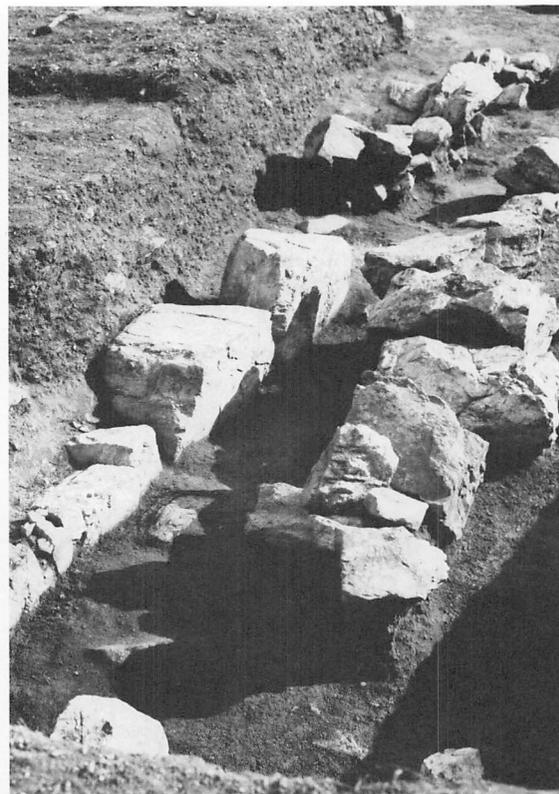
2 同 全景2 (南から)



1 音戸山8号墳全景（南から）



2 同 石室全景（石材転落状態、南から）



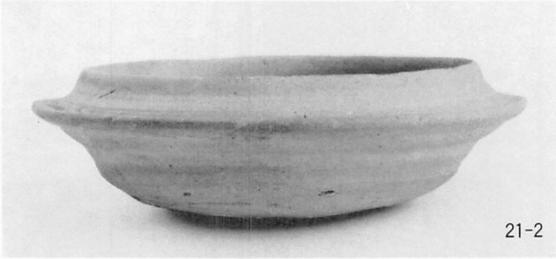
3 同 石室の状態（北西から）



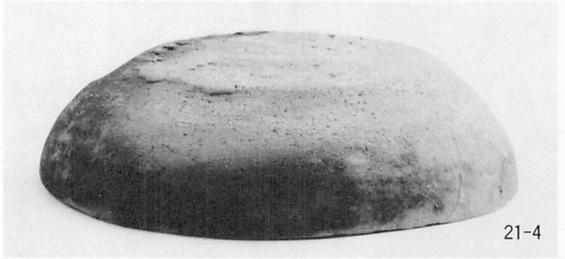
21-1



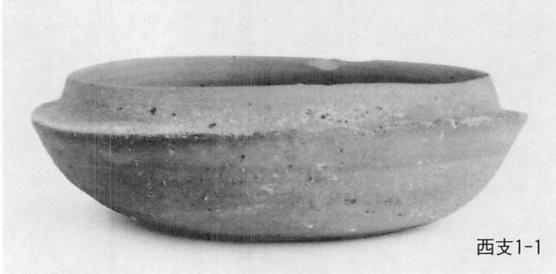
21-3



21-2



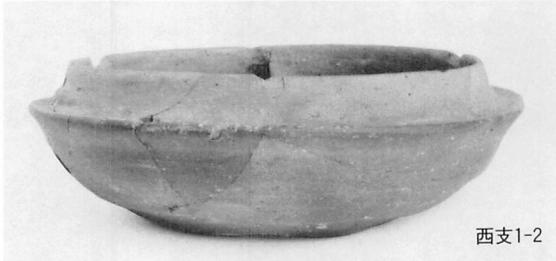
21-4



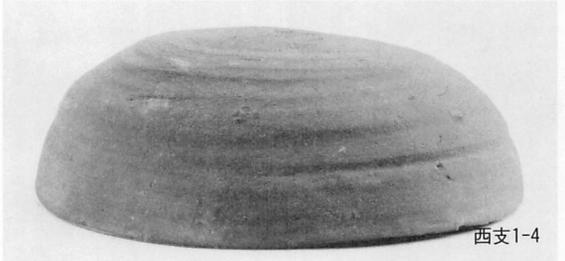
西支1-1



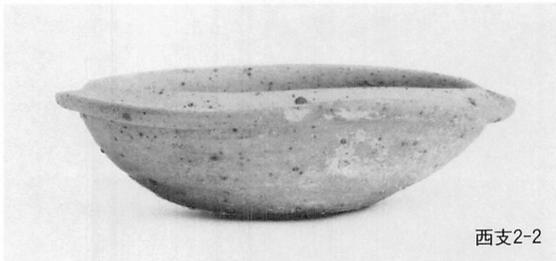
西支1-3



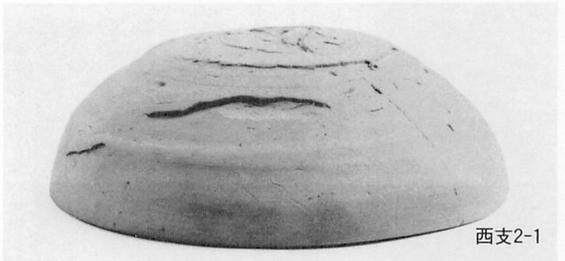
西支1-2



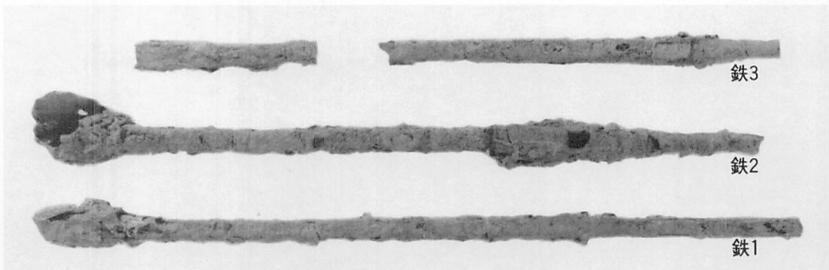
西支1-4



西支2-2



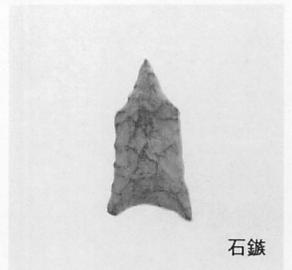
西支2-1



鉄3

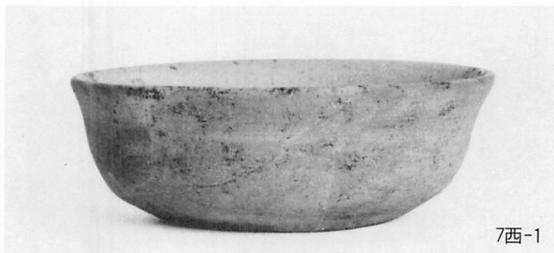
鉄2

鉄1



石鏃

御堂ヶ池21号墳(21-1~4, 鉄1~3)、音戸山西支群1号墳(西支1-1~4, 石鏃)、音戸山西支群2号墳(西支2-1・2)出土遺物



7西-1



7西-2



7西-3



8-1



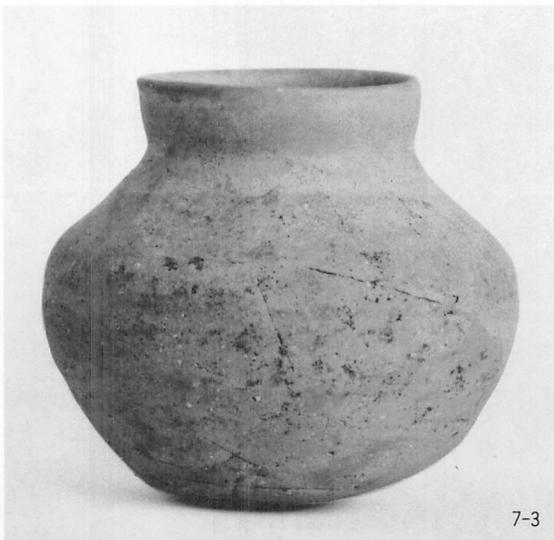
7西-4



8-4



7-2



7-3



8-5

音戸山7号墳(7-2・3)、7号墳西方斜面(7西-1~4)、音戸山8号墳(8-1・4・5)出土遺物

御堂ヶ池古墳群
音戸山古墳群

発掘調査概報

昭和60年度

発行日 昭和61年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社